

高松平野南東部における埋蔵文化財調査報告書

**光専寺山遺跡**

**竹元遺跡**

**高野廃寺**

**本村遺跡**

2008年3月

**高松市教育委員会**

## 例　　言

1 本報告書は、高松市教育委員会が高松平野南東部において実施してきた埋蔵文化財調査のうち、未報告であり、出土遺物等から遺跡の内容が把握できたものを報告するものである。

2 調査地および調査期間は、卷末に掲載した抄録のとおりである。

3 調査および整理作業は、高松市教育委員会が担当した。調査担当者は次のとおりであり、整理作業および報告書作成は文化部文化振興課文化財専門員川畠聰が担当した。

光専寺山遺跡：藤井雄三（文化振興課）

竹元遺跡：中西克也（文化振興課非常勤嘱託）、末光甲正（讃岐文化遺産研究会）

高野廃寺：川畠　聰

本村遺跡：調査団（団長小竹一郎）

4 発掘調査から整理作業および報告書執筆を行うにあたって、下記の関係機関ならびに方からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（敬称略）

香川県教育委員会、末光甲正

5 挿図として、国土地理院地形図1/25,000「高松南部」「川東」および高松市都市計画図1/2,500「三谷1～3」を一部改変して使用した。

6 本報告の高度値は海拔高を表し、地図以外の方位は磁北を示す。

7 発掘調査で得られた資料は、一部を除いて、高松市教育委員会で保管している。

## 目　　次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 光専寺山遺跡	4
第3章 竹元遺跡	8
第4章 高野廃寺	12
第5章 本村遺跡	14

# 第1章 地理的・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。さらに、この平野は、讃岐山脈から流下し北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ、本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて、このうち春日川上流域および新川支流吉田川の中・上流域は、昭和30～41年まで木田郡山田町と称していた。高松平野の南東端にあたり、すぐ南には讃岐山脈が控えており、平地の標高は20～50m前後を測る。西側は讃岐山脈から続く標高255mの上佐山などによって遮られ、東側は小規模な丘陵がのびており、この間に植田地区の平地が存在し、さらに春日川や吉田川の扇状地には川島・十川地区の平地が広がっている。

## 第2節 歴史的環境

調査地周辺は、古代においては讃岐国山田郡に含まれる。『倭名抄』によれば「殖田」「蘇甲」「池田」「坂本」といった郷名が見られ、現在の東・西植田町、十川東・西町、池田町、川島本町、川島東町に該当すると考えられている。

これらの地域、とくに第2図の範囲内において、最古の遺跡は十川東・平田遺跡で、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土している。本村遺跡では縄文後期の土器片が自然河川から出土し、竹元遺跡では縄文晚期後半の土坑と自然河川が確認されている。ほかに縄文土器出土を伝える遺跡はあるが、詳細は不明である。

弥生時代の遺跡でもっとも古いのは、光専寺山遺跡である。小丘陵より前期末の土器包含層が確認されている。本村遺跡でも、前期末～後期の土器が自然河川から出土している。中期末から後期初頭に属する中山田遺跡は、丘陵上に立地する高地性集落で、焼失した痕跡を残す竪穴住居跡や倉庫跡などが検出されるとともに、分銅形土製品が出土している。通谷遺跡でも中期末の土器が出土するとともに、後期後半の土器棺墓が7基確認されている。後期後半に属する竹元遺跡では、竪穴住居跡や大溝・土坑が検出されている。葛谷遺跡も後期の遺跡で、ベッド状遺構を有する竪穴住居跡が検出されているほかに、有茎銅鏡が出土している。円養寺遺跡では、後期末以降の土器棺墓が4基確認され、切谷遺跡でも後期に属する土器棺群の出土が伝えられている。十川東・平田遺跡では、後期末の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・自然河川が検出されている。このように後期になると遺跡数が増加しており、この動向は高松平野中央部と連動しているようである。

次の古墳時代では、集落跡は不明だが、古墳が数多く確認されている。円養寺遺跡では、前期に属する直径8～30mの円墳3基が調査されており、粘土床をもつ竪穴式石郭3基や箱式石棺1基とともに、銅鏡が1面出土している。同じ前期と推定される川東1号墳からは、銅鏡1面と玉類が昭和5年に出土しており、円墳と伝えられる。中期初頭に属する三谷石舟古墳は、全長88mの巨大な前方後円墳で、高松平野南東部における盟主墳である。国分寺町鶯ノ山産の剣拔式石棺が後円部に露出している。次いで盟主墳として築造されたのが、削平された高野丸山古墳である。直径約42mを測る大型円墳で、幅10～15mの周濠が巡っている。西尾天神社古墳は、直径35m、高さ約4mを測る二段築成の円墳で、墳頂部に安山岩の板石が認められ、中期後半と推定されている。後期前半に属する尾越古墳は、丘陵頂部に立地する全長36mの前方後円墳で、家形埴輪や円筒埴輪の出土が知られている。大龜古墳群も、尾越古墳と同じ後期前半と推定される円墳群で、丘陵上に現存3基、おそらく5基以上から構成され、円筒埴輪や鉄刀、須恵器が出土している。



第1図 遺跡位置図

高野南1号墳からも円筒埴輪片が採集されている。後期後半以降になると、この地域においても横穴式石室を主体部にもつ古墳が多く築造されるようになる。調査されたものでは、石舟池古墳群で11基、中山田3・4号墳で2基、葛谷遺跡で1基の古墳が検出されている。未調査だが、上佐山東麓古墳や東植田八幡馬場先2号墳では石室が開口しており、東植田八幡馬場先1号墳も石材が露出している。ほかに、光専寺山中央・西古墳、池田合子神社御旅所古墳、本村古墳群などが知られるが、時期・内容ともに実態はよく分かっていない。

古墳以外では、古墳時代後期末～飛鳥時代に操業していた公渕池窯跡群の須恵器窯があり、窯業地域として機能していたことがうかがえる。

飛鳥時代になると、この地域においても古墳築造が終焉し、寺院建築が認められる。高野廃寺では、転用された礎石が確認できるとともに、重弧文軒平瓦をはじめ、主に奈良～平安時代の軒瓦が採集されており、平安中期の軒丸瓦には淡路国分寺跡出土のものと同文品が見られる。下司廃寺では、塔跡と推定される礎石をもつ基壇が残されており、周辺からは大和川原寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦、せん仏が出土している。集落跡としては、西下遺跡で飛鳥～奈良時代の溝・掘立柱建物跡が検出され、露尾遺跡(旧西尾遺跡)でも奈良時代の掘立柱建物跡群と溝が検出されている。平安時代後期と推定される鰐宇神社経塚では、銅製經筒が出土している。

鎌倉～室町時代といった中世では、葛谷遺跡で柱穴が検出されている。この葛谷遺跡の近くから甕と備蓄銭が出土している。図示していないが、松尾廃寺は丘陵上に位置し、鎌倉時代の軒丸瓦が表採されている。光専寺山遺跡は、その名の示すとおり室町時代に光専寺が建っていたと伝えられており、室町時代頃の遺物が表採されている。神内家墓地石塔群は、鎌倉時代末期～室町時代にかけての石塔を伴う墳墓群であり、神内氏の墓地として今も守られている。十川東・平田遺跡では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物跡・溝・土坑から構成される小集落が検出されている。

室町時代から始まる戦国期の動乱は、この地域にも及び、数多くの城館が造られている。神内家墓地の造営集団である神内氏の神内城跡、三谷氏の上佐山城跡・三谷城跡・池田城跡、十河氏の十河城跡、植田氏の戸田城跡・戸田山城跡・稗田城跡がある。神内・三谷・十河氏は、植田氏一族の3兄弟とも伝えられ、これら4氏がともに提携して活躍していたようである。その中で、戦国末期に頭角を現したのが十河氏で、阿波三好氏から養子をもらうことで阿波から讃岐にかけて一大勢力を築くが、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻によって、領国からの撤退を余儀なくされる。その後、十河氏は豊臣秀吉の四国平定に従い再び戻ってくるが、九州戸次川の戦いで当主が討死している。以上の合戦などにより、各氏族はその勢力を失い、城館も廃絶していったようである。

江戸時代では、この地域は、生駒家4代による讃岐一国支配の後、松平家11代による高松藩領となり、明治維新を迎えるのである。



- |                   |            |             |                      |                |
|-------------------|------------|-------------|----------------------|----------------|
| 1 高野丸山古墳          | 2 高野廃寺     | 3 高野南1・2号墳  | 4 石舟池古墳群             | 5 三谷石舟古墳       |
| 6 三谷城跡            | 7 通谷遺跡     | 8 上佐山城跡     | 9 光専寺山遺跡, 光専寺山中央・西古墳 |                |
| 10 川東1号墳          | 11 池田城跡    | 12 本村遺跡     | 13 上佐山東麓古墳           | 14 池田合子神社御旅所古墳 |
| 15 中山田遺跡・中山田3・4号墳 |            | 16 尾越古墳     | 17 大龜古墳群             | 18 本村古墳群       |
| 19 切谷遺跡           | 20 円養寺遺跡   | 21 神内家墓地石塔群 | 22 神内城跡              | 23 葛谷遺跡        |
| 24 稗田城跡           | 25 下司廃寺    | 26 竹元遺跡     | 27 八幡馬場先古墳群          | 28 戸田山城跡       |
| 29 戸田城跡           | 30 丸山古墳    | 31 城池古墳群    | 32 公渕池窯跡群            | 33 十河城跡        |
| 34 鰐宇神社経塚         | 35 西尾天神社古墳 | 36 露尾遺跡     | 37 西下遺跡              | 38 十川東・平田遺跡    |

第2図 周辺主要遺跡位置図 (縮尺1/30,000)

## 第2章 光専寺山遺跡

### 第1節 調査

光専寺山は、上佐山の東斜面から突出した直径約150mを測るほぼ円形の丘陵である。古墳2基や室町時代の寺跡伝承が知られ、弥生時代以降の遺物が表採されている。光専寺山で農地整備が計画されたため、昭和57年4月下旬に確認調査を実施した。調査地は、山上の東側耕作地で、頂上付近から一段下りた平坦地である。2×2mのトレンチを南北に2列・東西に3列で計6本設定し、北東隅をAトレンチと称し、以下南西トレンチをFトレンチと称している。図面類が所在不明であり、調査担当者の記憶によるしかないが、Aトレンチ最下部の黒色粘質土から弥生土器がまとまって出土したという。遺物ラベル名からAトレンチは5層までの分層がされており、第5層出土遺物が圧倒的に多いことから、Aトレンチ第5層が弥生土器大量包含層と考えられる。他にはFトレンチ最下層からも遺物が少量出土している。その後、香川県教委から昭和58年に刊行された『新編 香川叢書 考古篇』に一部が紹介され、調査面積は約20m<sup>2</sup>で、表土より1.5m下で厚さ50cmの包含層を確認したと記述されており、これがAトレンチ第5層と考えられる。なお、明確な遺構は確認されていない。

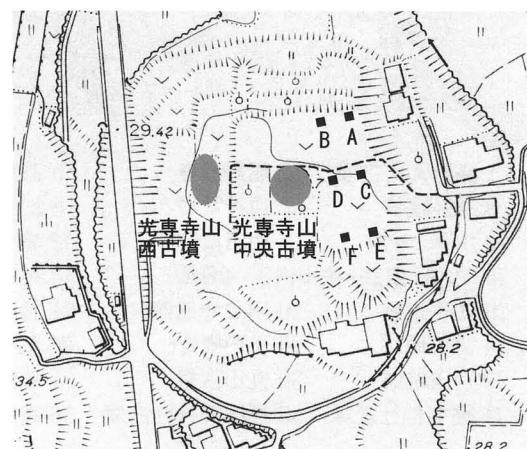
### 第2節 遺物

第4図はAトレンチ出土遺物のうち層位が明らかなもので、1は第2層、2・3は第3層、4～12は第5層出土のものである。1・2は弥生土器甕で、多条のヘラ描き直線文を体部に施すもので、前期末のものである。3は土師質土器碗の底部で、中世のものである。4・5は弥生土器壺で、体部に4は貼付突帯文3条、5はヘラ描き直線文3条を施しており、前期末のものである。6～8は弥生土器甕で、8の体部には6条のヘラ描き直線文が施されており、前期末のものである。9・10は弥生土器の底部である。11はいぶし瓦の丸瓦で、凹面に布目が残る小型のもので、室町時代のものと想定される。12は土師質土器釜で、口縁部と鍔が退化しており、16世紀のものと想定される。

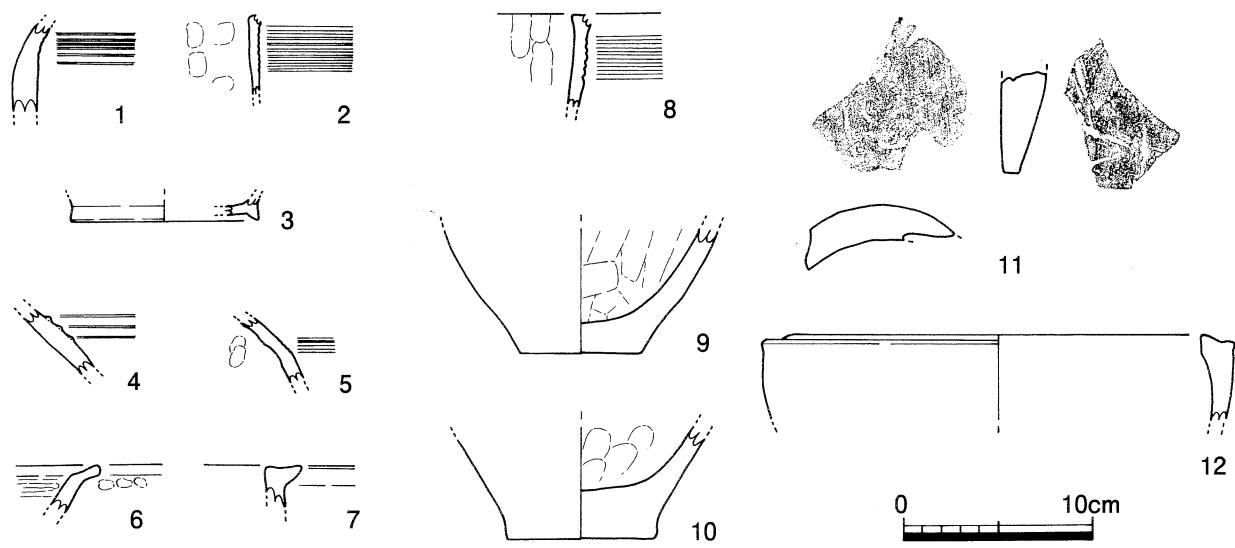
第5図は、Fトレンチ最下層出土遺物で、13～16は弥生土器、17は瓦器碗である。13・14は高杯で、14の口縁部外面には凹線3条が施される。15は甕の体部で、叩き痕が残されている。16は小型鉢で、内面に横方向のハケが施されている。これらは弥生後期のものである。17の瓦器碗は、内面にやや疎らなヘラミガキが認められ、13～14世紀のものと想定される。

第6・7図は注記のない弥生土器だが、大半が『香川叢書』に図面が掲載されている資料で、調査時の状況よりAトレンチ第5層から出土したものと考えられる。18～20は壺で、18の頸部にはヘラ描き直線文4条を、19の頸部には貼付突帯文2条を施している。21～23は甕で、逆L字口縁のものである。21の体部には櫛描きの直線文15条・波状文3条・直線文11条が施されている。22の口縁端部には刻目文が、体部にはヘラ描き直線文10条が施されている。23は無文である。24は逆L字口縁の鉢で、体部上半に把手がつく。これら弥生土器は、21に櫛描き直線文が認められることから、前期末～中期初頭のものと考えられる。

第8図は表採遺物である。26・27は弥生土器甕で、前期末のものである。28は須恵器の小型壺で、備前焼の可能性がある。29・30は土師質土器皿で、口径8.8～9.0cmを測り、12～13世紀のものと考えられる。31は土師質土器鍋である。32は龍泉窯系青磁碗で、鎬蓮弁が施されており13世紀のものである。33はいぶし瓦の丸瓦で、凹面に布目が残る。34は打製石器の刃器、35は磨製石器の柱状石斧で、弥生時代のものである。



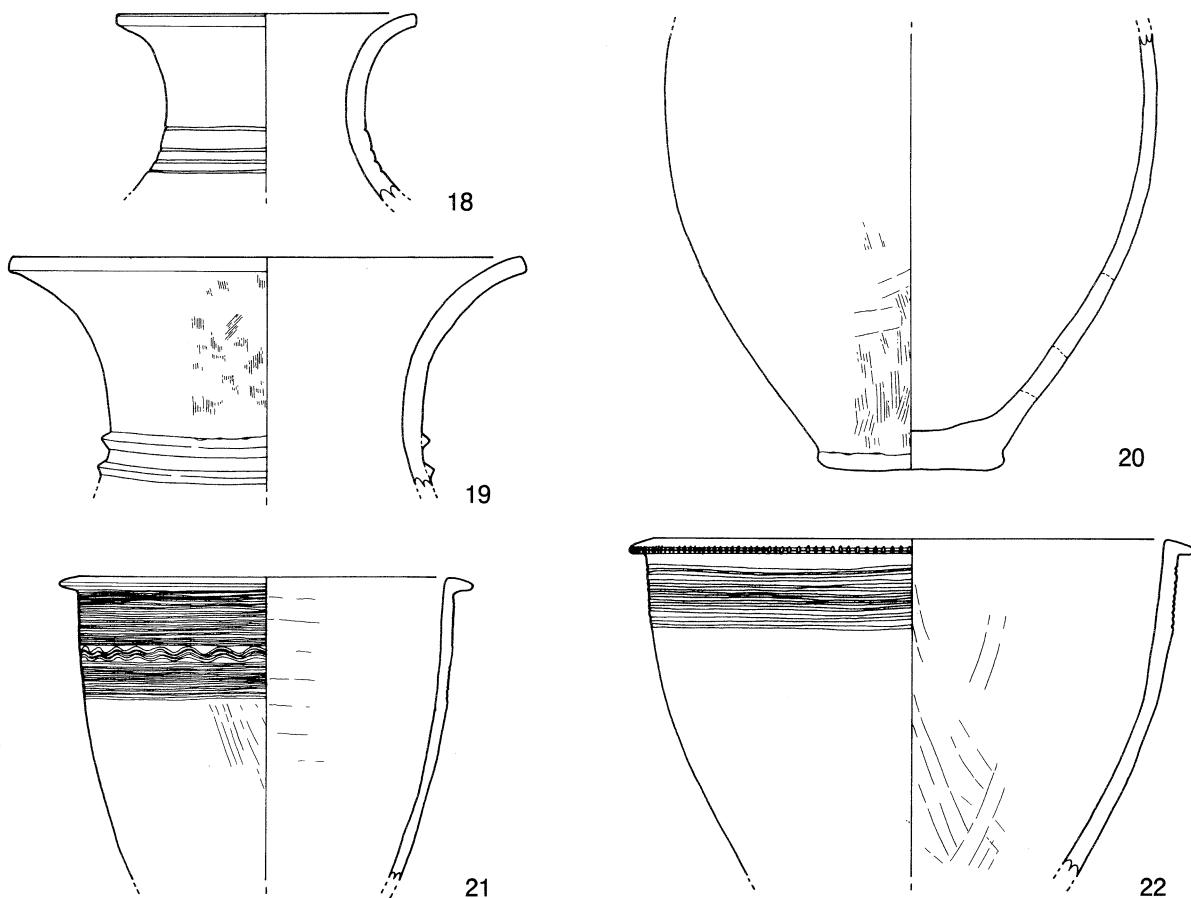
第3図 光専寺山遺跡 調査地位置図



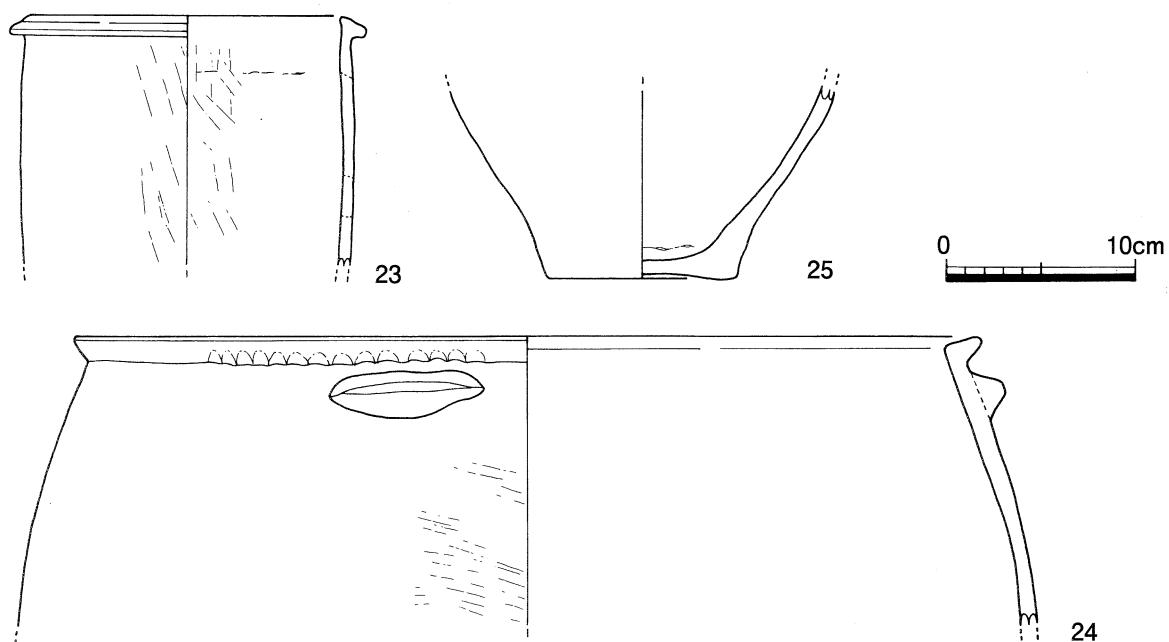
第4図 光専寺山遺跡 Aトレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4, 1は第2層, 2・3は第3層, 他は第5層）



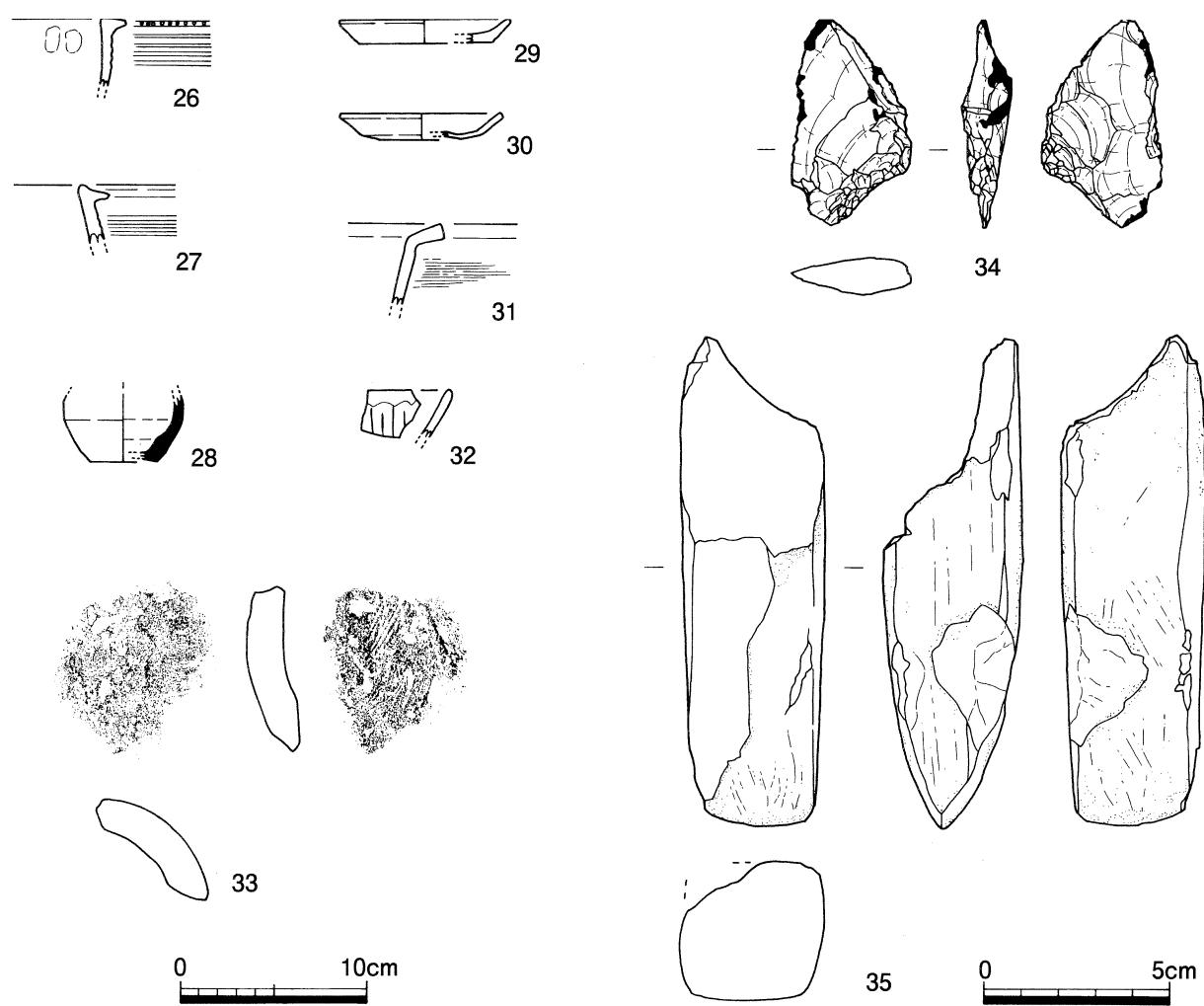
第5図 光専寺山遺跡 Fトレンチ最下層出土遺物実測図（縮尺1/4）



第6図 光専寺山遺跡 Aトレンチ出土遺物実測図①（縮尺1/4）



第7図 光専寺山遺跡 Aトレンチ出土遺物実測図②(縮尺1/4)



第8図 光専寺山遺跡 表採遺物実測図(縮尺1/4, 34・35は1/2)

※法量の()は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
1	弥生土器壺			(4.7)	外面体部:ナデ 内面体部:ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:にぶい橙7.5YR7/4	3mm以下の石英・長石を含む	外面体部:ヘラ描き直線文6条
2	弥生土器壺			(4.2)	外面体部:摩滅 内面体部:指頭圧痕, ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:橙7.5YR6/6	1mm以下の石英・長石を含む	外面体部:ヘラ描き直線文8条
3	土師質土器碗	10.0	(1.2)		外面底部:回転ナデ 内面底部:摩滅	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
4	弥生土器壺			(3.6)	外面体部:ナデ 内面体部:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい赤褐5YR5/4	2mm以下の石英・長石を含む	外面体部:貼付突帯文3条
5	弥生土器壺			(2.4)	外面体部:ナデ 内面体部:指頭圧痕, ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/1	2mm以下の石英・長石を含む	外面体部:ヘラ描き直線文3条
6	弥生土器壺			(2.6)	外面口縁部:指頭圧痕, ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:横方向のヘラミガキ	外面:にぶい赤褐5YR4/3 内面:にぶい黄褐10YR6/4	1mm以下の石英・長石を含む	
7	弥生土器壺			(2.2)	外面口縁部:ナデ 内面口縁部:ナデ	外面:黒褐5YR2/1 内面:黒褐7.5YR4/2	5mm以下の石英・長石を含む	
8	弥生土器壺			(5.0)	外面口縁部:摩滅 内面口縁部:指頭圧痕, ナデ	外面:にぶい黄橙7.5YR6/3 内面:黒褐7.5YR3/1	1mm以下の石英・長石を含む	外面体部:ヘラ描き直線文6条
9	弥生土器底部	6.4	(6.6)		外面底部:摩滅 内面底部:縦方向の板ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	5mm以下の石英・長石を含む	
10	弥生土器底部	7.8	(6.0)		外面底部:ナデ 内面底部:指頭圧痕, ナデ	外面:明赤褐2.5YR5/6 内面:灰赤2.5YR4/2	5mm以下の石英・長石を含む	
11	丸瓦	長さ5.3	幅8.0		凸面:縦方向の板ナデ 凹面:縦方向の板ナデ, 布目	凸面:暗灰N3/ 凹面:暗灰N3/	1mm以下の石英・長石を含む	いぶし瓦
12	土師質土器釜	22.0		(4.5)	外面口縁部:摩滅 内面口縁部:摩滅	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	2mm以下の石英・長石を含む	
13	弥生土器高杯			(3.0)	外面口縁部:摩滅 内面口縁部:摩滅	外面:橙5YR7/6 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石を含む	
14	弥生土器高杯			(2.5)	外面口縁部:摩滅 内面口縁部:ヨコナデ	外面:にぶい赤褐5YR4/4 内面:暗赤褐5YR3/4	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	外面口縁部:凹線3条
15	弥生土器壺			(3.7)	外面底部:叩き痕 内面底部:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:褐灰7.5YR4/1	3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
16	弥生土器鉢	9.6	2.8		外面:摩滅 内面:横方向のハケ	外面:灰褐7.5YR4/2 内面:黒褐7.5YR3/1	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
17	瓦器碗			(3.1)	外面体部:ナデ 内面体部:ヘラミガキ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
18	弥生土器壺	16.0		(9.5)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:横方向のヘラミガキ? 内面:摩滅	外面:にぶい橙5YR7/3 内面:にぶい橙5YR7/3	4mm以下の石英・長石を含む	外面頸部:ヘラ描き直線文4条
19	弥生土器壺	27.0		(12.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	3mm以下の石英・長石を含む	外面頸部:貼付突帯文2条
20	弥生土器壺		10.0	(23.3)	外面体部:縦方向のハケ 内面体部:摩滅	外面:赤褐10R4/4 内面:にぶい黄橙10YR7/2	5mm以下の石英・長石を含む	
21	弥生土器壺	22.0		(16.2)	外面口縁部:摩滅 体部:縦方向のハケ 内面:摩滅	外面:灰白2.5Y7/2 内面:灰白2.5Y8/1	5mm以下の石英・長石を含む	外面体部:櫛描き直線文15条 櫛描き波状文3条 櫛描き直線文11条 外面:黒班
22	弥生土器壺	30.0		(18.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:摩滅 内面:縦方向の板ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR7/3	3mm以下の石英・長石を含む	外面口縁端部:刻目文 体部:ヘラ描き直線文10条
23	弥生土器壺	19.0		(13.3)	体部:縦方向のハケ	外面:にぶい橙2.5YR6/3 内面:にぶい橙2.5YR6/3	4mm以下の石英・長石を含む	内面体部:接合痕
24	弥生土器鉢	48.8		(15.5)	外面口縁部:指頭圧痕, ヨコナデ 体部:斜め方向のヘラナデ 内面:摩滅	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	5mm以下の石英・長石を含む	内外面体部:黒班
25	弥生土器底部		10.0	(10.0)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい橙5YR6/4 内面:黒褐10YR3/1	3mm以下の石英・長石を含む	
26	弥生土器壺			(3.6)	外面口縁部:摩滅 内面口縁部:指頭圧痕, ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:にぶい黄橙10YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	外面口縁端部:刻目文 体部:ヘラ描き直線文4条
27	弥生土器壺			(3.2)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:橙7.5YR7/6 内面:浅黄橙7.5YR8/4	1mm以下の石英・長石を含む	外面体部:ヘラ描き直線文3条
28	須恵器壺		3.6	(3.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰灰2.5Y5/1 内面:灰N6/	密	備前焼?
29	土師質土器皿	9.0	7.1	1.2	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:淡橙5YR8/4 内面:淡橙5YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
30	土師質土器皿	8.8	4.2	1.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:橙5YR7/6	3mm以下の石英・長石を含む	
31	土師質土器鍋			(5.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:横方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ヨコナデ	外面:灰褐7.5YR4/2 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
32	青磁碗			(2.6)	外面:施釉 内面:施釉	断面:灰白N8/ 釉薬:明緑灰10GY7/1	密	外面体部:鶴蓮弁 龍泉窓系
33	丸瓦	長さ9.0	幅6.0		凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:灰黄褐10YR5/2 凹面:灰黄褐10YR5/2	1mm以下の石英・長石を含む	いぶし瓦
34	打製石器刃器	長さ5.7	幅3.2	厚さ1.4			サヌカイト	重さ:17.0g
35	磨製石器柱状石斧	長さ13.2	幅4.9	厚さ4.8			片岩	重さ:280.3g

第1表 光専寺山遺跡 出土遺物観察表

### 第3節 まとめ

Aトレント第5層から出土した遺物は、ほぼ弥生時代前期末～中期初頭のものに限られ、当該時期の土器研究を考える上で良好な包含層といえる。ただし、一部に室町時代の遺物が認められ、これら新しい時期の遺物が混入した可能性がある。今後は、第5層の時期や性格を明確にするには、より広い面積の調査が必要である。また、Fトレントでは弥生後期の遺物が認められ、当該期の遺跡であることも今回明らかとなった。さらに、表採のものも含め鎌倉～室町時代の土器や瓦は、伝承どおり当該期の寺院跡がある可能性を示すものであり注目できる。

# 第3章 竹元遺跡

## 第1節 調査

竹元遺跡は、朝倉川南岸の段丘崖上に立地する。県道塩江屋島西線の拡幅工事に伴い、平成5・8年度に香川県教育委員会により発掘調査が実施されるとともに、平成5年度には本市教委により消防屯所建築工事に伴い試掘調査が実施されている。これらの調査の結果、平成8年度第Ⅱ調査区より北側において遺構・遺物が認められ、第2遺構面では縄文晩期～弥生前期の自然河川・土坑、第1遺構面では弥生後期中葉の豊穴住居跡・土坑・溝が検出されている。なお、調査区より北側は段丘崖となっており、朝倉川の浸食を受けているものと考えられる。これら調査より遡ること昭和62年夏において、台風による土砂崩れが県道東側で発生し、その際に弥生土器がまとまって出土した。この報告を受けて、本市教委は現地に赴き、出土遺物の採集を行った。その後、県教委刊行の『下川津遺跡』で、出土土器の一部が紹介されている。

## 第2節 遺物

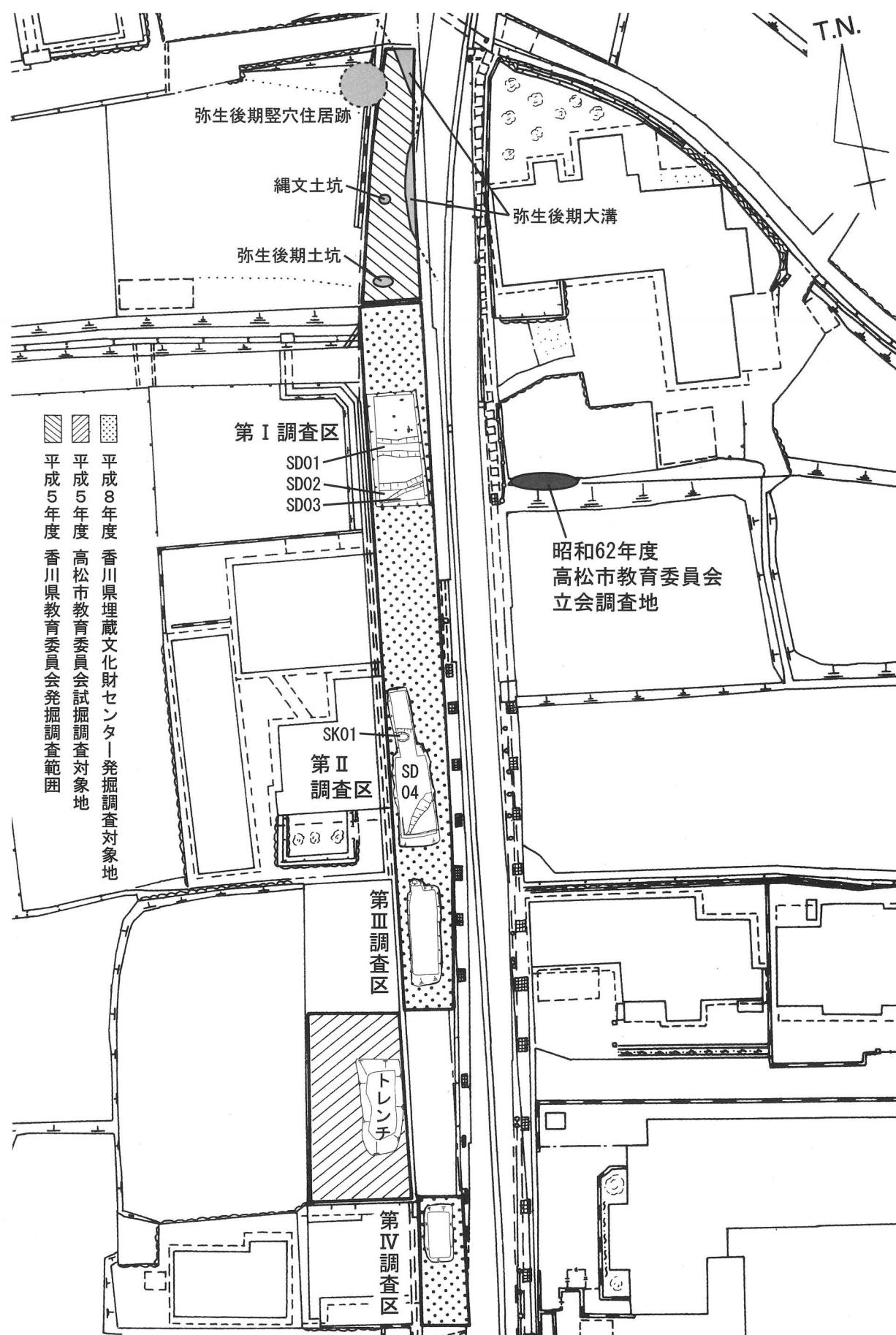
弥生土器が25ℓ相当コンテナで1箱分出土し、図化したのが第10図の31点である。このうち、15点は『下川津遺跡』で紹介されていたものである。1～10は甕で、口頸部は「く」の字形に強くまたは緩く屈曲し、体部は球形で、中にはやや肩が張るものもある。体部外面の調整は、縦または斜め方向のハケが多いが、叩き痕を留めるものもある。6では体部外面下半はヘラミガキ調整である。11～13は広口壺で、口縁部が横方向に広く開く。14～17は高杯で、強い横ナデで外反する口縁部に、杯部には密なヘラミガキが施されている。脚部はラッパ状に開き、穿孔が見られる。18～20は小型の鉢である。21～23は大型の鉢で、浅い球形の体部をもつものである。24・25は製塩土器で、短い脚部を付け、体部外面の調整はヘラケズリである。26～31は底部の破片で、平底気味のものが多いが、個体によっては球形のものも見られる。これら土器のうち、胎土に角閃石を含み、茶系統の色彩を呈する「下川津B類土器」と呼ばれるものは、図示した31点中15点認められる。ただし、『下川津遺跡』では、竹元遺跡出土土器の総数は破片も含めると605点あり、そのうち34%がB類土器であるという(大久保1990)。また、これら弥生土器の所属時期については、『下川津遺跡』では下川津Ⅱ式～Ⅲ式新段階とされており、弥生時代後期中葉にあたる。

## 第3節 まとめ

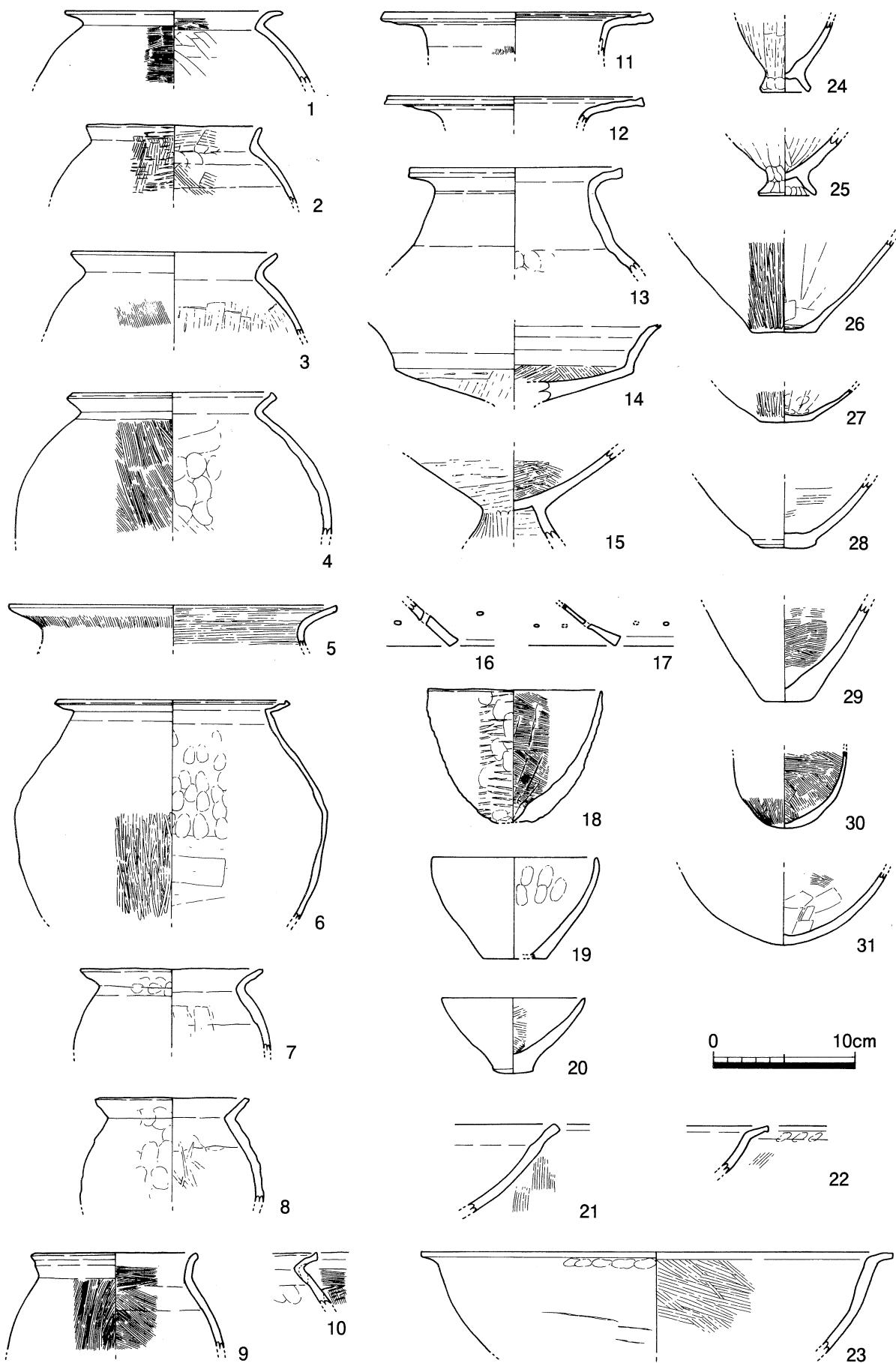
昭和62年度における竹元遺跡出土の弥生土器は、土砂崩れによる表採資料でありながら、時期的にはまとまっており評価できる。ただし、遺構との関連付けは難しい。平成5年度の県教委の調査では、弥生後期大溝の延長上に出土地点があることが指摘されたが、平成8年度の県埋文センターの調査では、新たにSD01～03が検出され、これら溝群とも近接した位置関係にあり、現時点では出土遺構を判断するのは困難である。また、後世の開発等で出土地付近は削平されており、今後の調査でも遺構が確認できるかどうかは分からぬ。しかしながら、県道西側だけでなく東側においても竹元遺跡が広がることが、これら弥生土器の出土で証明でき、今後は竹元遺跡が東西にどこまで広がるか確認する必要がある。

## 参考文献

- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会ほか  
片桐孝浩 2006 『県道屋島西線道路局部改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 竹元遺跡』香川県教育委員会  
國木健司 1994 「竹元遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度』香川県教育委員会



第9図 竹元遺跡 調査地位置図 (縮尺1/500, 片桐2006より転載・一部改変)



第10図 竹元遺跡 出土遺物実測図 (縮尺1/4, 1・2・4・6~13・18・20・26・27は大久保1990より転載)

\*法量の()は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
1	弥生土器 甕	15.2		(5.1)	外面口縁部:ヨコナデ、横方向のハケ 体部:横方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:横方向の板ナデ	外面:赤褐色5YR4/6 内面:にぶい赤褐色5YR5/4	4mm以下の石英・長石を含む	
2	弥生土器 甕	12.2		(5.4)	外面口縁部:叩き痕 体部:叩き痕、縦方向のハケ 内面口縁部:横方向のハケ 体部:指頭圧痕、斜め方向のハケ	外面:褐7.5YR4/6 内面:明褐色5YR5/6	5mm以下の石英・長石を含む 内面体部:接合痕	
3	弥生土器 甕	14.4		(5.7)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:斜め方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のヘラケズリ	外面:浅黄褐色10YR8/3 内面:灰白10YR8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
4	弥生土器 甕	14.0		(10.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧痕、斜め方向のヘラケズリ	外面:明褐色7.5YR5/6 内面:褐灰7.5YR4/1	3mm以下の石英・長石を含む	
5	弥生土器 甕	22.0		(2.8)	外面口縁部:縦方向のハケ 内面口縁部:横方向のハケ	外面:暗赤褐色2.5YR3/6 内面:明褐色2.5YR5/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
6	弥生土器 甕	16.0		(15.5)	外面口縁部:ヨコナデ 体部下半:縦方向のヘラミガキ 内面口縁部:ヨコナデ 体部上半:指頭圧痕 体部下半:横方向のヘラケズリ	外面:にぶい黄褐色10YR5/3 内面:灰褐色10YR5/2	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む 外面部下半:煤付着	
7	弥生土器 甕	12.8		(5.5)	外面口縁部:ヨコナデ、指頭圧痕 体部:摩滅 内面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のヘラケズリ	外面:褐灰10YR5/1 内面:褐灰10YR6/1	2mm以下の石英・長石を含む	
8	弥生土器 甕	10.2		(7.3)	外面口縁部:ナデ、指頭圧痕 体部:指頭圧痕 内面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のヘラナデ	外面:褐灰10YR5/1 内面:褐灰10YR6/1	5mm以下の石英・長石を含む 内面体部:接合痕	
9	弥生土器 甕	11.4		(6.9)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:横方向のハケ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:褐灰7.5YR4/1	2mm以下の石英・長石を含む 内面体部:接合痕	
10	弥生土器 甕			(3.8)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:叩き痕、横方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ヨコナデ、指頭圧痕	外面:明褐色7.5YR5/6 内面:明褐色7.5YR5/6	2mm以下の石英・長石を含む	
11	弥生土器 広口壺	18.6		(3.2)	外面口縁部:ヨコナデ 頸部:縦方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:明赤褐色5YR5/6 内面:明赤褐色5YR5/6	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
12	弥生土器 広口壺	17.8		(2.0)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:にぶい赤褐色5YR4/4 内面:にぶい褐7.5YR5/3	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
13	弥生土器 広口壺	14.6		(7.4)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧痕	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:にぶい赤褐色5YR5/4	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
14	弥生土器 高杯			(5.6)	外面杯部上半:ヨコナデ 杯部下半:横方向のヘラケズリ 内面杯部上半:ヨコナデ 杯部下半:4方向のヘラミガキ	外面:にぶい褐7.5YR5/6 内面:にぶい褐7.5YR5/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
15	弥生土器 高杯			(5.3)	外面脚部:横方向のヘラケズリ 脚部:縦方向のヘラミガキ 内面杯部:4方向のヘラミガキ 脚部:横方向のヘラケズリ	外面:明褐色2.5YR5/6 内面:明褐色2.5YR5/6	4mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
16	弥生土器 高杯			(3.3)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む 脚部:円孔1個	
17	弥生土器 高杯			(3.0)	外面:摩滅 内面:横方向のヘラケズリ	外面:明褐色5YR5/6 内面:明褐色5YR5/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む 脚部:円孔2個	
18	弥生土器 鉢	12.2		9.5	外面:指頭圧痕、叩き痕 内面:横方向のハケ	外面:灰褐色10YR5/2 内面:灰褐色10YR5/2	2mm以下の石英・長石を含む 外面:黒班	
19	弥生土器 鉢	11.6	4.4	7.2	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧痕、ナデ	外面:にぶい黄褐色 7.5YR7/4 内面:にぶい黄褐色 7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
20	弥生土器 鉢	10.0		5.4	外面:ナデ 内面:横方向のハケ	外面:灰褐色10YR5/2 内面:灰褐色10YR5/2	2mm以下の石英・長石を含む 外面部底部:黒班	
21	弥生土器 鉢			(6.3)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:縦方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	外面:にぶい黄褐色10YR7/3 内面:にぶい黄褐色10YR6/3	1mm以下の石英・長石を含む	
22	弥生土器 鉢			(3.4)	外面口縁部:指頭圧痕 体部:斜め方向のハケ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
23	弥生土器 鉢	33.0		(7.1)	外面口縁部:指頭圧痕、ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:斜め方向のハケ	外面:にぶい黄褐色10YR6/3 内面:にぶい黄褐色 7.5YR7/4	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む 外面部:接合痕	
24	弥生土器 製塙土器		3.2	(5.0)	外面体部:縦方向のヘラケズリ 脚部:指頭圧痕 内面体部:ナデ 底部:ナデ	外面:にぶい黄褐色10YR7/3 内面:にぶい黄褐色 7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
25	弥生土器 製塙土器		4.2	(4.2)	外面体部:ナデ 脚部:指頭圧痕 内面体部:ナデ 底部:指頭圧痕	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:明褐色7.5YR5/6	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
26	弥生土器 底部		4.4	(6.7)	外面体部:縦方向のハケ 内面体部:縦方向のヘラケズリ	外面:褐7.5YR4/3 内面:にぶい黄褐色10YR6/4	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む 外面部:煤付着	
27	弥生土器 底部		3.5	(2.4)	外面体部:縦方向のハケ 内面体部:指頭圧痕、縦方向のヘラケズリ	外面:にぶい赤褐色5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む 外面部:煤付着	
28	弥生土器 底部		4.2	(4.7)	外面:摩滅 内面:横方向のハケ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
29	弥生土器 底部		3.0	(7.0)	外面:摩滅 内面:横方向のハケ	外面:浅黄褐色7.5YR8/4 内面:にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	
30	弥生土器 底部		1.0	(5.4)	外面:ナデ、縦方向のハケ 内面:斜め方向のハケ	外面:にぶい黄褐色10YR7/3 内面:灰褐色10YR6/2	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
31	弥生土器 底部			(5.3)	外面:縦方向のヘラケズリ 内面:斜め方向のハケ・板ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石を含む	

第2表 竹元遺跡 出土遺物観察表

# 第4章 高野廃寺

## 第1節 調査

平成18年8月28日、高野廃寺が所在する丹生神社境内において、手洗鉢覆屋の建築工事をしている際に瓦が出ていると本市教委に通報があった。これを受け丹生神社に赴いたところ、本殿から南東方向にあたる境内端において、基礎部分の掘削工事が終わり、その横に廃土が盛られていた状態で現場が確認でき、廃土には瓦片が混じっていた。掘削範囲は、南北90cm×東西2m 60cmの長方形を1m間隔で南北に2つ並べた形であり、掘削深度は50cmであった。掘削された壁面を観察すると、地表から約30cmまでは花崗土の盛土で、その下に灰褐色シルト質極細砂の遺物包含層が確認された。ただし、掘削が包含層内に留まっていることから、遺構は確認されなかった。事業主である氏子総代と協議をした結果、これ以上の掘削を行わず遺構を保護するとともに、廃土の遺物を収集することで合意した。廃土からは、平瓦片および丸瓦片を主体として、軒平瓦および土師器・須恵器の土器片が少量出土し、25ℓコンテナ4箱分を数えた。

## 第2節 遺物

出土遺物のうち図化したのは5点である。1は須恵器甕の体部で、外面に平行目の叩き痕が見られる。2は土師器甕で、やや開く直立した口縁部で、頸部内面と口縁端部に横方向のハケが見られる。3は土師質土器皿の底部である。4は土師質土器釜の脚部である。5は軒平瓦で、高野廃寺KY202と分類したものである(川畑1996)。瓦当文様は上区に線鋸歯文、内区に連弧文、下区に変形唐草文を配している。この唐草文は、オリジナルは偏向唐草文だったものが、均整唐草文の影響を受けて、向って右に4回、左に2回反転している。勝賀廃寺や百相廃寺出土の軒平瓦に粗形が求められ、藤原宮式が大きく崩れたものと想定される。緩い曲線顎で、凹凸両面とも瓦当側は不定方向のナデ調整だが、尻側の凹面には布目と模骨痕、凸面には縄目叩き痕が残る。凸面の瓦当から7.5cmの箇所には、部分的に幅2.5cmの赤色顔料を塗布した痕跡が横方向に残っていることから、建築部材に塗った赤色顔料が軒瓦下面にも付着したものと考えられる。この赤色顔料は、他の個体で実施した蛍光X線分析よりベンガラ(酸化鉄)であることが判明している(川畑1994)。軒平瓦の年代は、文様や形態・調整から8世紀代のものと考えられる。

## 第3節 まとめ

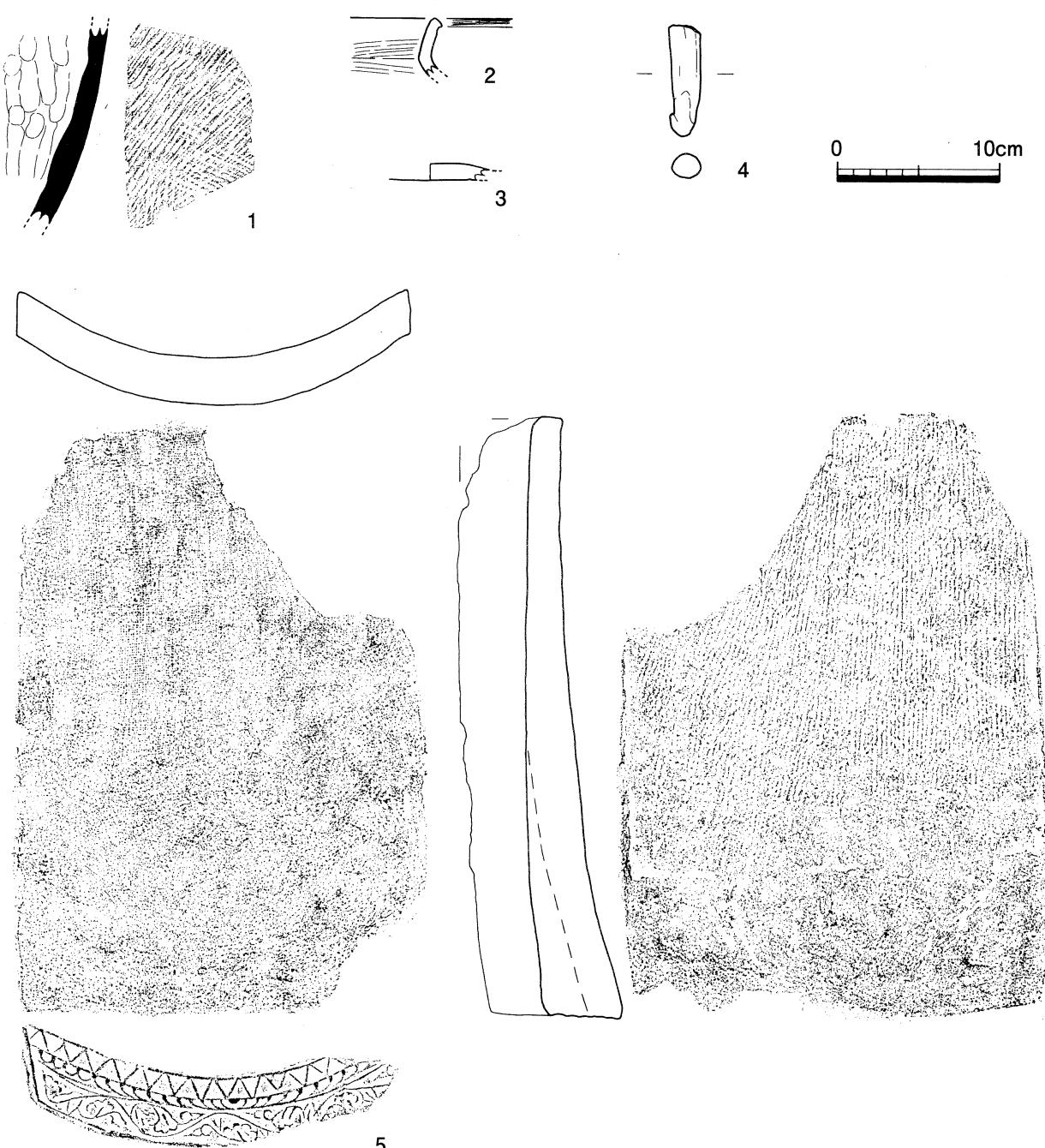
今回の調査地点は、丹生神社本殿南東側の境内端にあたる。本殿東側おそらく本殿と今回の調査地点の間付近において、昭和20年1月20日にも掘削されており、今回出土したのと同じ軒平瓦や、これと組み合う軒丸瓦が出土している。おそらく本殿東側には、瓦溜などの遺構や良好な包含層が埋没している可能性が高く、今後は丹生神社境内地における確認調査等が必要であろう。

### 参考文献

- 川畑聰1994「資料紹介」『高松市歴史資料館年報 平成4年度～5年度No.1』高松市歴史資料館  
川畑聰1996『第11回特別展 讀岐の古瓦展』高松市歴史資料館



第11図 高野廃寺 調査地位置図



第12図 高野廃寺 出土遺物実測図 (縮尺1/4)

※法量の()は、残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
1	須恵器 甕			(12.2)	外面体部:平行目の叩き痕 内面体部:指頭圧痕、ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰黄2.5Y6/2	密	
2	土師器 甕			(3.6)	外面口縁部:横方向のハケ 内面口縁部:横方向のハケ	外面:灰黄褐10YR4/2 内面:にぶい黄褐10YR4/3	1mm以下の石英・長石を含む	
3	土師質土器 皿			(1.0)	外面底部:ナデ 内面底部:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:橙7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石を含む	
4	土師質土器 釜			(6.8)	外面脚部:ナデ	外面:にぶい黄褐10YR5/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
5	軒平瓦	全長 37.1	幅 24.2	厚さ 4.9	凹面前部:不定方向のナデ 後部:布目(尻部まで) 凸面前部:不定方向のナデ 後部:繩目叩き痕	凹面:灰7.5Y6/1 凸面:灰7.5Y6/1	1mm以下の石英・長石を含む	変形偏行唐草文

第3表 高野廃寺 出土遺物観察表

# 第5章 本村遺跡

## 第1節 調査の概要

本村遺跡の発掘調査は、高松市池田町において計画された市道拡幅工事に伴い昭和48年に実施されたものだが、当時の本市には文化財専門員が不在であったため、本市文化財保護委員であった小竹一郎氏を団長として結成された調査団に委託する形で実施された。調査期間は9月10日から10月3日まで、その後は整理および概報作成が実施された。ただし、概報は手書きのもので、調査団より市教委へ提出されたままであり、現在のように刊行物として広く周知されなかった。そのため、この概報1冊のみが本市教委に残されただけで、調査団から市教委へ提出を受けたはずの出土遺物も長い年月の間に所在不明となっている。そこで、概報を今回刊行物として広く周知することにより、埋蔵文化財の記録保存を図るものである。なお、掲載にあたっては「周辺の遺跡」部分など一部を省略するとともに、挿図を再トレースして版組み等も変更している。

### 高松市池田町 本村遺跡調査概報

遺跡所在地 高松市池田町本村 1179 番地  
調査担当 高松市教育委員会  
調査期間 自昭和48年9月10日  
至昭和48年10月3日

#### 一. 位置と周辺の遺跡

高松市池田町本村 1179 番地の地籍にある。上佐山東南麓で、山麓から春日川上流の川端に向って、東南方に突出した舌状の丘上にある。標高は 30 m 余、比高は春日川堤から 5 m にみたない丘である。遺跡の四周は水田が開け、その間に民家が点在している。

(省略)

池田町本村 1179 番地は村井昭氏の宅地で、かつて宅地内の畠を深耕した時や庭に泉水を掘った際、弥生遺物の出土を確認しており、また昭和48年4月下旬、安部藤夫氏が調査地横を試掘した時も弥生後期の土器片等を発見<sup>(注1)</sup>、弥生時代遺物包含層のあることが確かめられ、道路予定地が道路になる前に本格的な調査が待たれていたのである。

#### 二. 調査日誌

この調査の作業は、昭和48年9月10日に始まり、同年10月3日に終わった。その間の進行状況の大略をしるす。

- 9月11日 調査開始。発掘調査の範囲を定め、ブルドーザーで耕土を取り除く。明日からの作業打ち合わせ。
- 9月12日 発掘調査区域 = 幅5m（南北）長さ28m（東西）の広さを、深さ70cmまで土砂除去作業。作業場にテント設営。
- 9月13日 調査区域とその周辺測量。東西を4m毎に7区画に分け、西方より1.2.3.4.5.6.7の番号をつける。左右のセクション作製。土層の重なり、遺物の出土状況を記入。東西に幅50cm深さ30cmのトレンチ3条作製。土砂除去。遺物出土状況記入。
- 9月14日 前日のトレンチ及び左右セクション作製等続行。本日より土砂除去にベルト・コンベア使用。
- 9月15日 4区、5区、北半部トレンチ間の土砂除去。4区にあっては南西隅から北東隅に

向かう一線上に、5区にあっては、特に北壁寄りに遺物が多数出土。

- 9月16日 4区、5区、南半部トレンチ間の土砂除去。遺物分布状況記入。
- 9月17日 6区、トレンチ間、土砂除去。遺物出土状況記入。
- 9月18日 7区、トレンチ間、土砂除去。遺物の出土状況記入。
- 9月19日 7区、深さ2.0mまで順次土砂除去。セクション作製、遺物の出土状況記入。
- 9月20日 6区について前日と同様の作業を行う。
- 9月21日 5区について前日と同様の作業を行う。
- 9月22日 4区について前日と同様の作業を行う。
- 9月23日 3区について前日と同様の作業を行う。
- 9月24日 2区、1区について前日と同様の作業を行う。
- 10月3日 発掘作業の残務整理、資材撤去、ブルドーザーで掘出した土を埋め戻し、もとの状況に整地。現場の発掘作業を終わり、出土遺物並びに調査結果の整理に入る。

#### 三. 遺物包含層と出土状況

調査地の土層の状況は、第15図の通り、地表部の1.耕土層から、2.砂質褐色土層、3.砂質黒色土層、4.砂質褐色土層、5.砂質黄褐色土層、6.細砂層、7.白色細砂層、8.白色粗砂層、9.粗砂層…と重っていて、この厚さは200cmあるが、場所によっては中間の幾つかの土層を欠いていたり、又幾つかの土層が複雑に入り乱れたりしている。

遺物包含層は、2の砂質褐色土層と9の粗砂層に挟まれた(3.4.5.6.7.8)帯状の地帯である。この遺物包含層の深さ、厚さは一様ではなく、かなりの深浅、広狭の違いがみられる。即ち1区は地表から50cmの所から100cmにわたる50cmの厚さ、2区は70cm、3区は90cm、4区は110cm、5区は場所によって一様ではないが、一番厚い所で130cmである。6区は地表から60cmの所から150cmにわたる90cmの厚さ、7区は薄いところでは30cm、厚い所では80cmと、著しい差を示している。この様に遺物包含層は、1区から2区3区4区と次第に厚さを増して、4区の一番厚いところでは110cmに及んでいる。この区間の土層は極めて整然として安定した状態がみられる。

次に5区6区7区の遺物包含層は、薄い所では僅かに30cmから一番厚い所では130cmと、不規則に

厚薄の変化を示しているとともに包含層内の土層も複雑に入り乱れた状態がみられる。遺物の出土状況は、1区、2区、3区は何れも数点にとどましたが、4区からは一挙に数百点に急増し、5区、6区とその数を増して7区では最も多量に出土した。今回の調査で得たこれ等出土遺物の総点数は3000点を越えている。

遺物は、遺物包含層の中で地表から100cmから180cmの間で出土した物が大部分を占めているので、この地帯が遺物の集中的な包含帶と言えるであろう。その他の部分からは、散発的に発見される状況であった。なお、遺物の集中的な包含状態は、地表からの深さにおいて上記のような特定の範囲が見られると同時に、場所的にもその傾向がみられた。

即ち、4区にあっては南西隅から北東隅に向かう一直線上に遺物が集中し、5区、6区にあっては北半部、特に北壁寄りに、7区にあっては北壁並びに東壁寄りに遺物が集中していた。遺物の内容による出土状況の傾向としては、石器及び縄文式土器片は、集中的な包含場所は見られず、散発的に一個ずつ出土し、弥生式土器は、時代的に異なる物も前記の集中的に包含された場所に複合混在していた。

#### 四. 出土遺物

今回の調査で得られた遺物は、石器、鉄器、土器の各種に亘っている。中でも土器は最も多く、器型も甕、壺、高坏、鉢、器台等、多様で、完形2点をはじめ一片の破片までその点数は3000点を越える豊富さである。又、これ等の遺物は、同一時代のものではなく最も古いものは、縄文時代のものから弥生前期、中期、後期の永い年代に亘る遺物が複合している。

次に、主要遺物一覧表（第4表）を掲げて、特徴的な遺物を示すこととする。

#### 五. 結語

この度の発掘調査は、道路予定地の幅5.0m、長さ28.0mという限られた範囲であったが、量的に3000点を越えるという豊富な出土遺物を得、質的に縄文時代から弥生前期、中期、後期に亘る複合した遺物である点から、讃岐先史時代の解明に貴重な資料を得、大きな成果を挙げた。

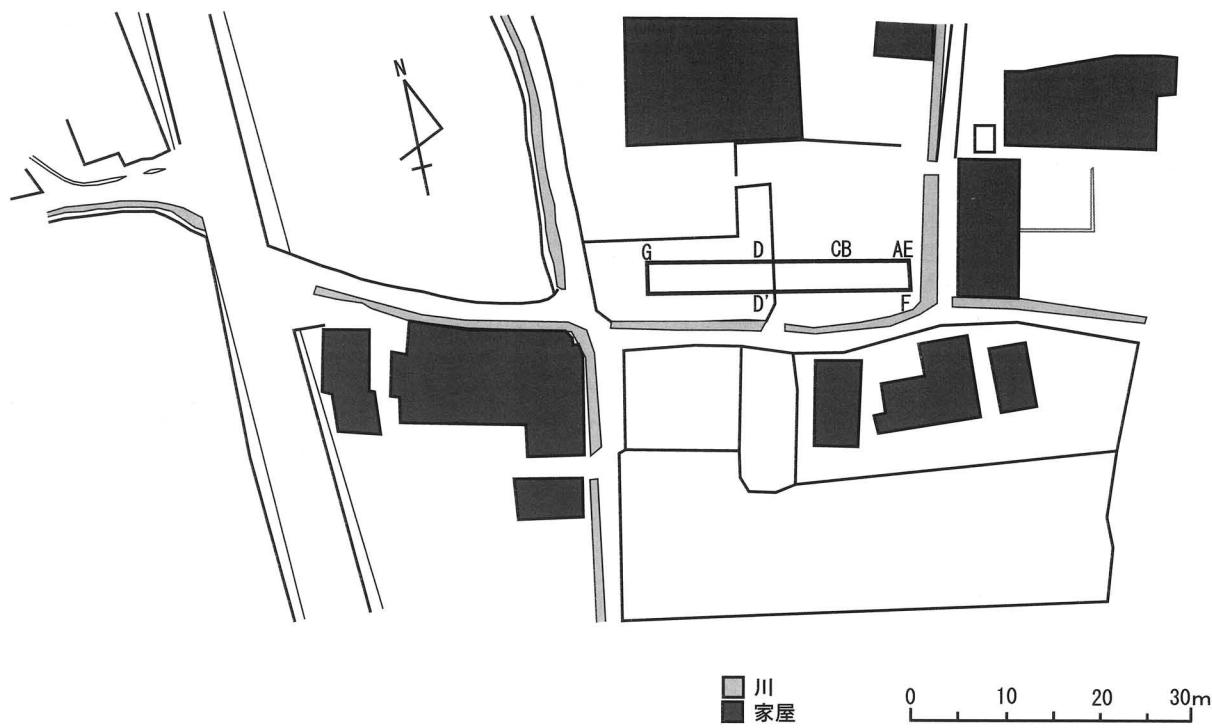
その最大の収穫は、縄文時代土器片数点を得たことで、これによって讃岐の内陸部において初めて縄文時代文化の跡が実証できることになった。

讃岐では、現在までに縄文遺跡が20ヶ所知られているが、それ等は何れも海岸に近いところと島嶼部に限られ、内陸部ではほとんどその例を見ない。

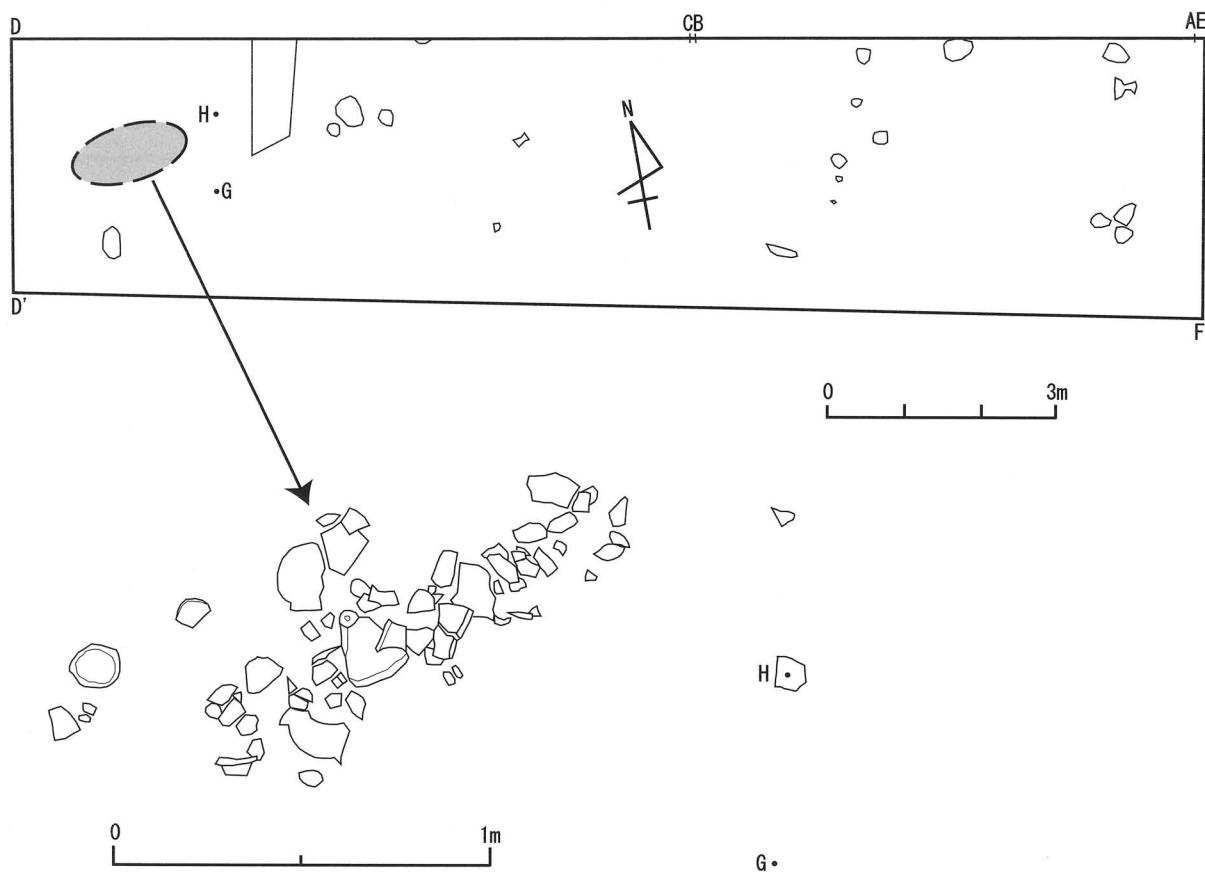
今回の調査で、かなり内陸部の池田町本村遺跡から、縄文時代遺物が発見できたことは、讃岐では縄文文化の跡は、海岸に近いところと島嶼部に限られると考えられていた趨勢を覆すに足る貴重な収穫である。

番号	遺物／種別	遺物の大きさ等			区画
<b>石器の部</b>					
1	石鏃（打製）	長さ1.5cm	巾1.1cm	厚さ0.25cm	3
2	石鏃（打製）	長さ2.0cm	巾1.0cm	厚さ0.25cm	6
3	石鏃（打製）	長さ3.4cm	巾2.5cm	厚さ0.4cm	7
4	石庖丁（打製）	長さ7.5cm	巾3.5cm	厚さ0.7cm	7
<b>鉄器の部</b>					
5	鉄鏃	長さ5.4cm	直径1.2cm		6
<b>縄文土器の部</b>					
6	縄文土器片	長さ11.0cm	巾4.5cm		6
<b>弥生式土器の部</b>					
<b>A. 甕</b>					
7	甕（底部欠）	口径13.2cm			7
8	甕（底部欠）	口径24.4cm			6
9	甕（底部欠）	口径29.2cm			5
<b>B. 壺</b>					
10	壺（底部欠）	口径11.0cm			7
11	壺（底部欠）	口径14.0cm			7
12	壺 完形	口径14.5cm	高さ19.0cm	底径5.0cm	7
13	壺 完形	口径13.0cm	高さ21.0cm	底径5.5cm	7
14	壺（底部欠）	口径13.2cm			7
15	壺（底部欠）	口径14.2cm			7
16	壺（底部欠）	口径150cm			7
17	壺（底部欠）	口径150cm			7
18	壺（底部欠）	口径150cm			5
19	壺（底部欠）	口径12.0cm			5
20	壺（底部欠）	口径14.0cm			5
21	壺（底部欠）	口径14.2cm			7
22	壺（底部欠）	口径15.0cm			7
23	壺（口縁欠）	底径4.0cm			6
24	壺（口縁欠）	底径4.0cm			7
25	壺（口縁欠）	底径5.4cm			7
26	壺（口縁欠）	底径5.0cm			7
27	壺（口縁欠）	底径5.5cm			7
28	壺（口縁部）	口径21.0cm			6
29	壺（首部）	口径18.0cm			5
30	壺（口縁部）	口径14.4cm			7
31	壺（口縁部）	口径21.0cm			7
32	壺（口縁部）	口径19.0cm			5
33	壺（首部）	口径15.8cm	首の長さ12.0cm		7
34	壺（首部）	口径18.0cm			7
<b>C. 高坏</b>					
35	高坏（台と坏の一部）	台の底径8.0cm	台の高さ9.0cm		4
36	高坏（杯と台の一部）	杯口縁直径19.5cm	深さ4.7cm		7
37	高坏（坏の部分）	杯口縁直径24.0cm	深さ5.0cm		5
38	高坏（ほぼ完形）	杯口縁直径30.0cm	深さ7.0cm		5
39	高坏（坏の部分）	杯口縁直径30.0cm	深さ5.0cm		5
<b>D. 鉢</b>					
40	鉢（底部欠）	口径20.0cm			7
41	鉢（一部欠）	口径17.4cm	高さ12.0cm	底径5.0cm	7
42	鉢（口縁欠）	底径5.0cm			6
<b>E. 器台</b>					
43	器台（中央部）	中央直径10.0cm			6

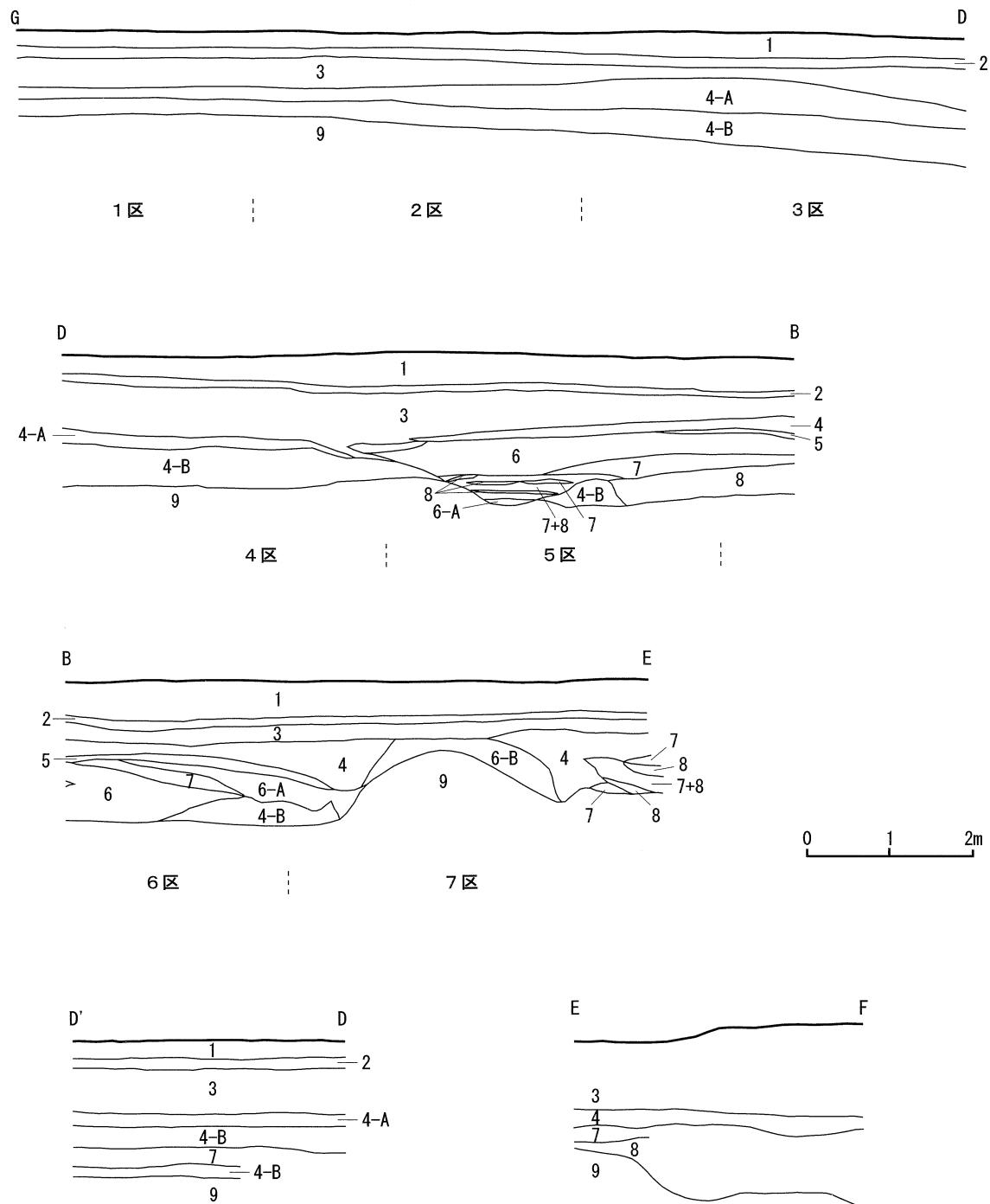
第4表 本村遺跡主要遺物一覧表



第13図 本村遺跡と周辺実測図 (縮尺1/800)



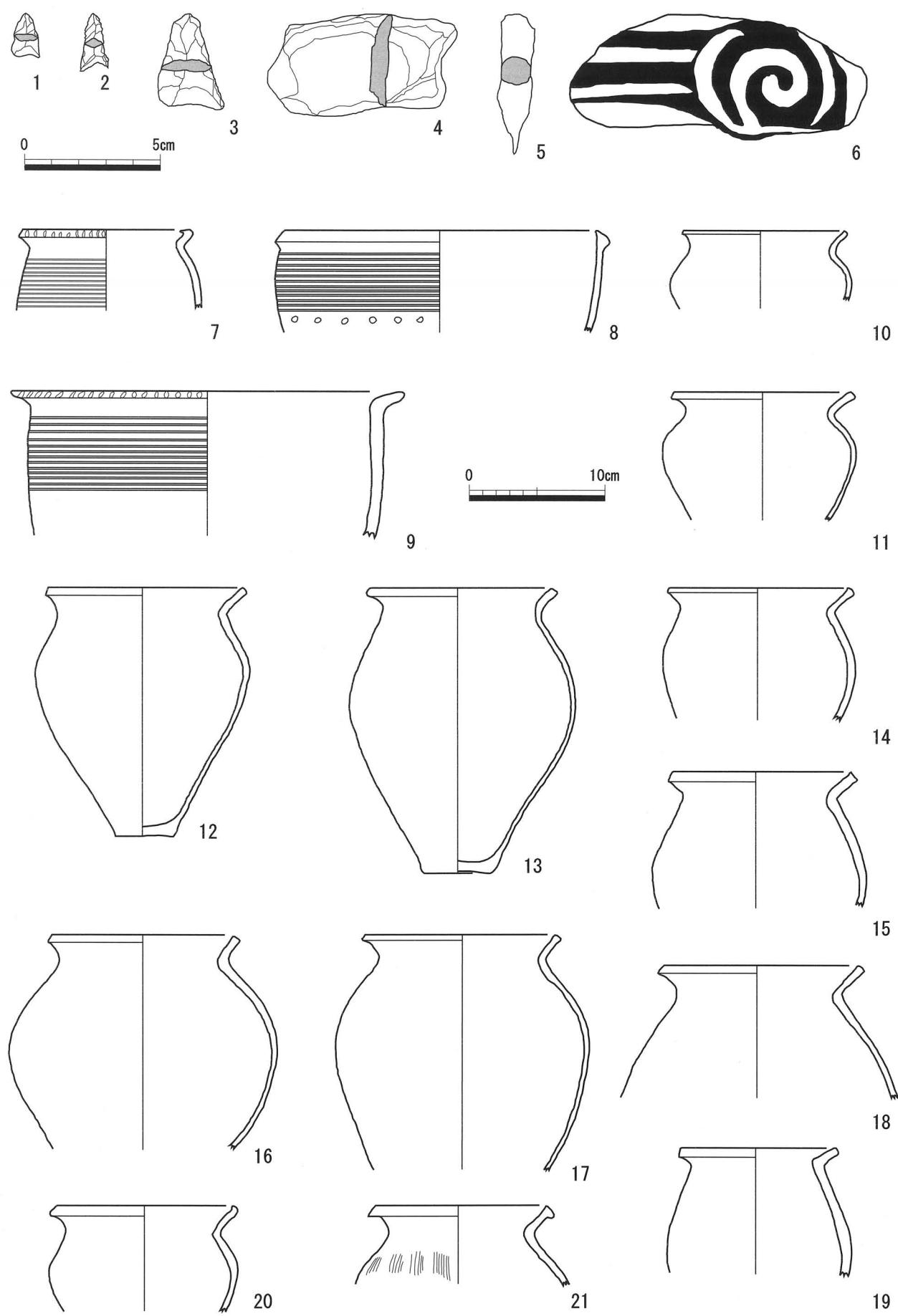
第14図 本村遺跡 遺物分布図 (上段: 縮尺1/100) HG付近遺物群図 (下段: 縮尺1/20)



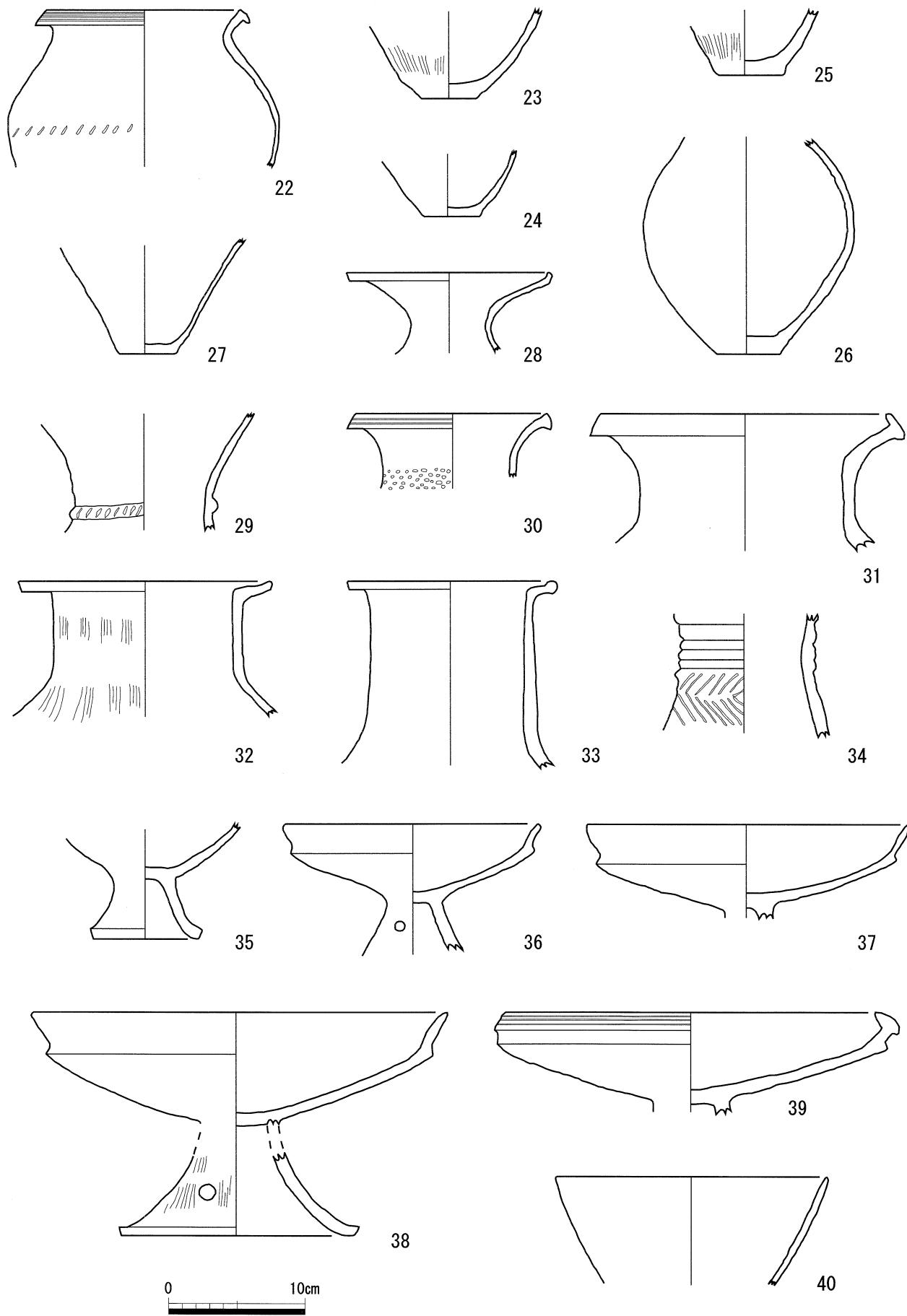
### 土層名

- |          |           |          |
|----------|-----------|----------|
| 1 耕土層    | 2 砂質褐色土層  | 3 砂質黒色土層 |
| 4 砂質褐色土層 | 5 砂質黃褐色土層 | 6 細砂層    |
| 7 白色細砂層  | 8 白色粗砂層   | 9 粗砂層    |

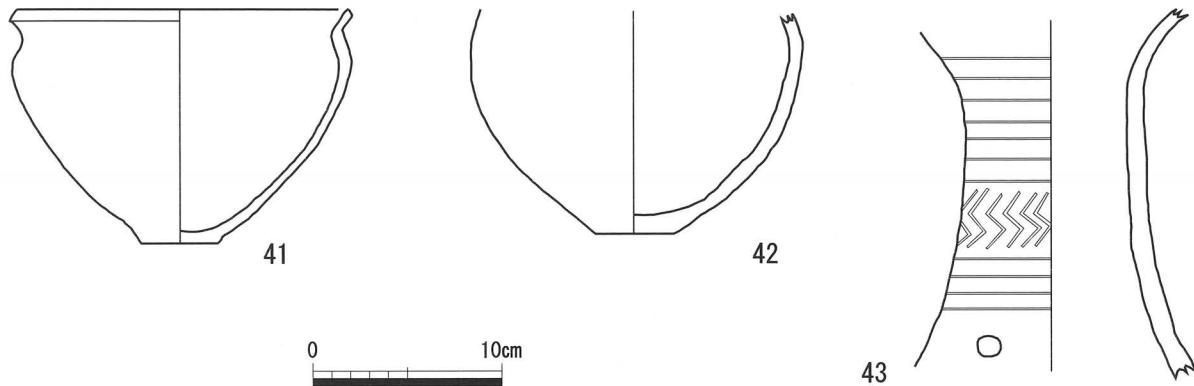
第15図 本村遺跡 断面図 (縮尺1/80)



第16図 本村遺跡 出土遺物略図① (1~6は縮尺1/2, 7~21は縮尺4/1)



第17図 本村遺跡 出土遺物略図② (縮尺4/1)



第18図 本村遺跡 出土遺物略図③(縮尺4/1)

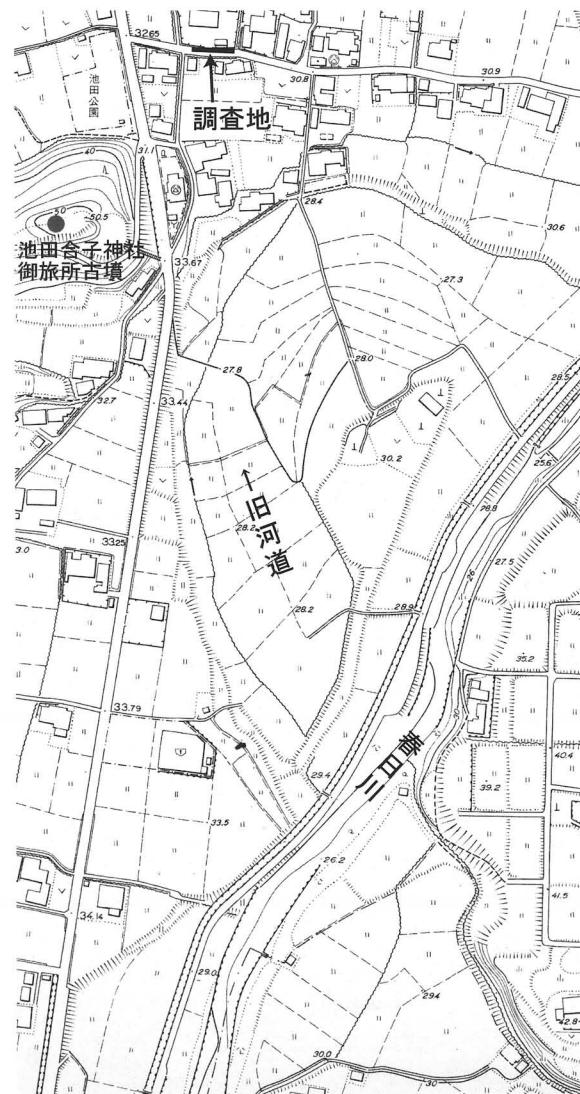
次に、弥生時代前期の土器数点の出土を見たことは、これによって、従来讃岐の農耕文化の開始は、西が中心（丸龜平野～行末、三井）（三豊平野～室本）で、東が遅れていたと考えられがちであった傾向に再考を促す資料を提供したものといえる。

最後に、今回調査の池田町本村遺跡は、既述の通り縄文時代から弥生後期に及ぶ遺物の出土地であるが、住居跡或いはその他当時の遺跡についてはこれを確認することが出来なかった。ただ、当地の遺物包含層の状況に見られる4区から7区にいたる間の粗砂層の変化、並びにE Fの粗砂層が、北から南へ急角度に低くなっていること、出土土器片の中に表面や割れ口が著しく磨滅しているものが数多く見られること等を合わせ考えると、谷川の流れていたところか、いずれにしても隣接地よりも低地で、しかも当時の住居地に近いところであったと推定できる。

注1 現在、瀬戸内海歴史民俗資料館に保管されている本村遺跡出土土器が、安部氏が試掘した時の遺物と考えられる（平成19年10月確認）。編集者注。

以上が調査団の概報であり、第13～18図と写真図版3～4は、概報の図版である。これら資料によると、調査地は砂質土層または砂層の堆積が約2mあり、遺構は確認できないが弥生土器を主体とした遺物が堆積層からまとまって出土していることから、弥生時代を中心とした旧河道が埋没していたことが分かる。地形図からも南北方向に走る地区画の乱れが見られ、春日川の旧河道が存在していたことが判読できる。

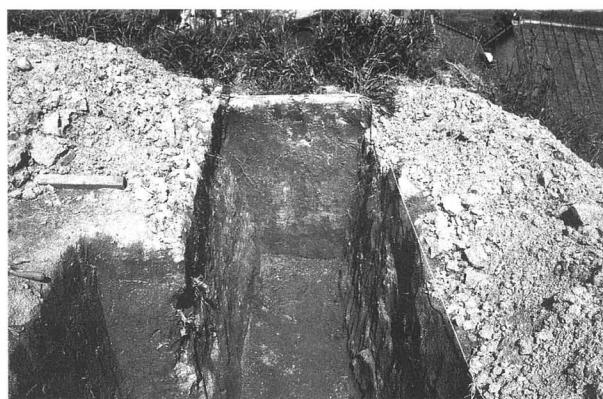
次に出土遺物であるが、縄文後期と推定される磨消縄文の土器が出土していることは注目でき、縄文後期の遺跡が上流域に存在すると想定される。もっとも数量が多いのは、弥生後期前半の土器であり、付近に集落が存在していた可能性を示唆している。



第19図 本村遺跡 周辺地形図 (縮尺1/2,500)



1 A トレンチ完掘状況（南から）



2 E トレンチ完掘状況（西から）



18



22



19



23

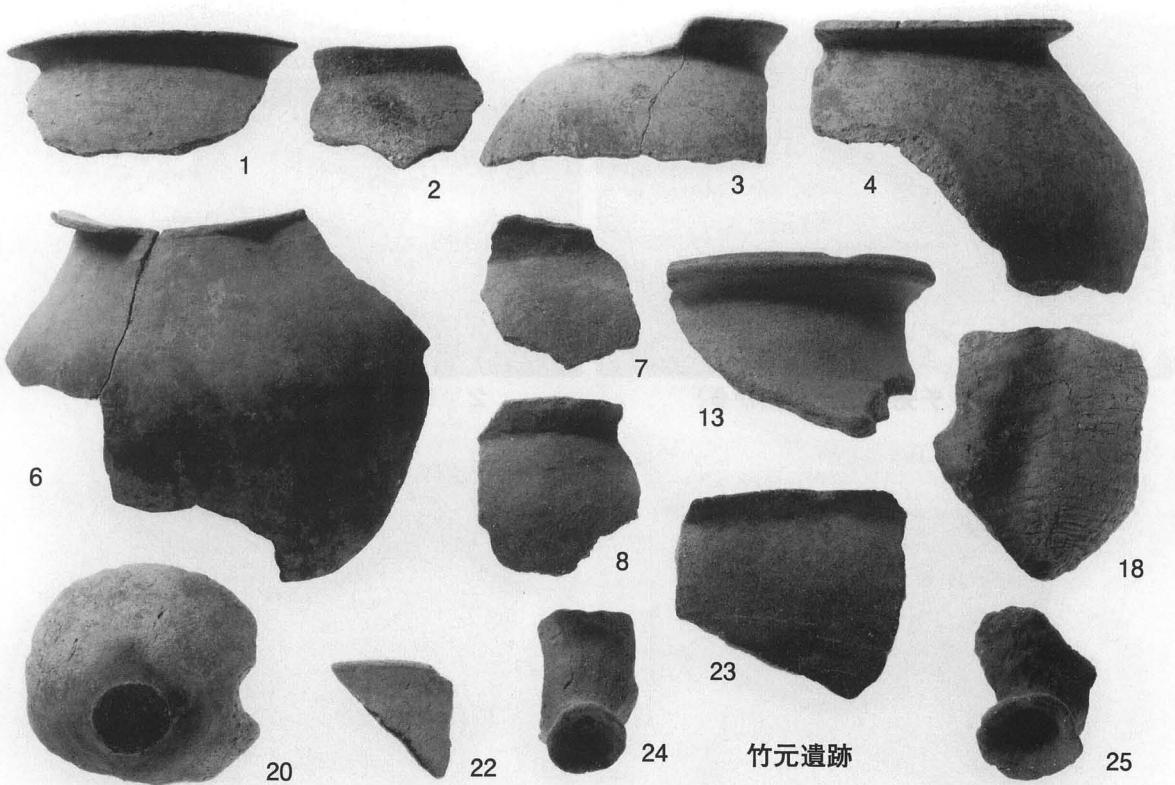


21

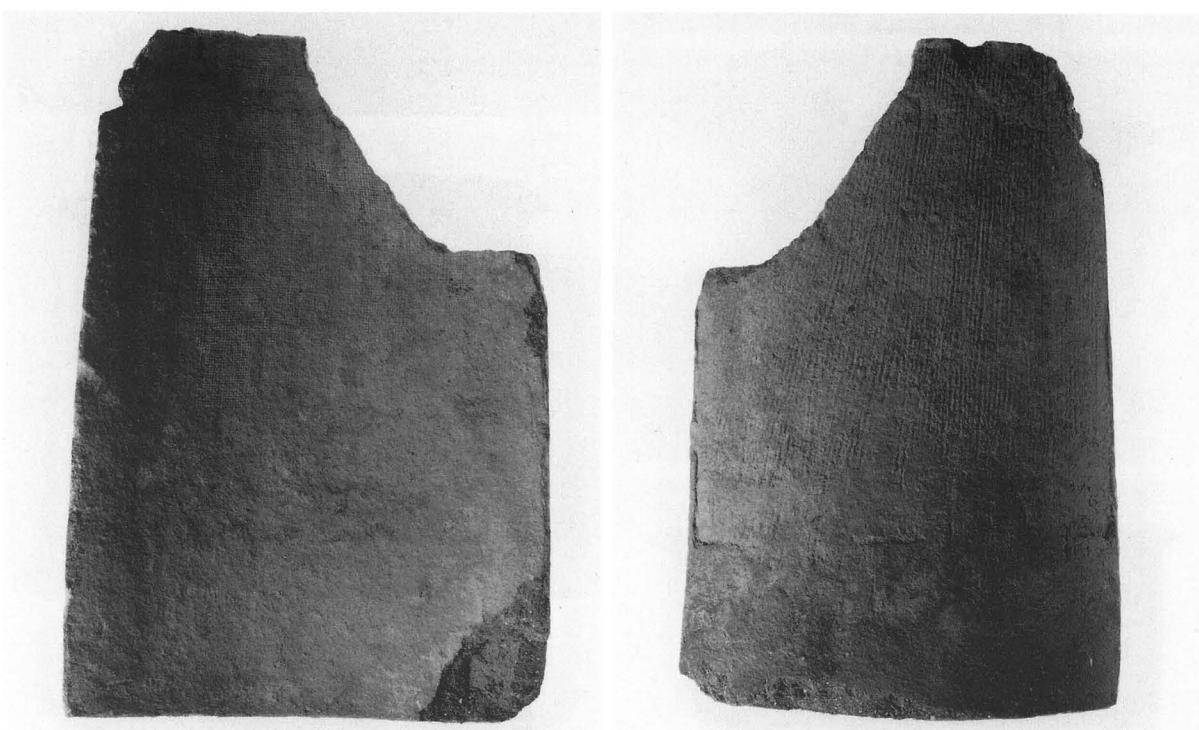


24

写真図版2 竹元遺跡 高野廃寺



竹元遺跡

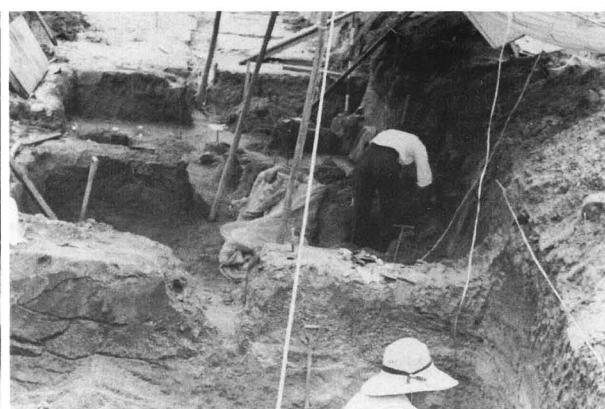


高野廃寺 5





1 調査前の現場全景



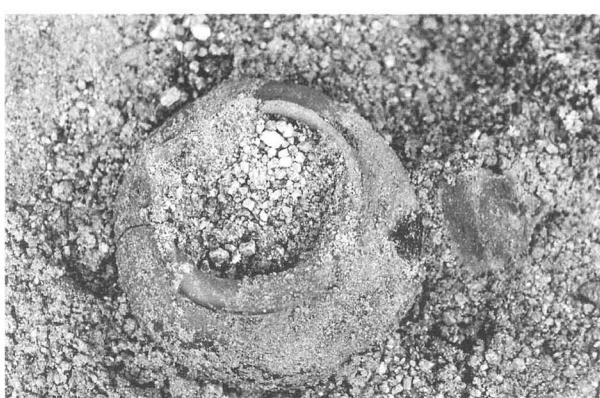
2 4区発掘作業



3 D点断面



4 5区遺物群



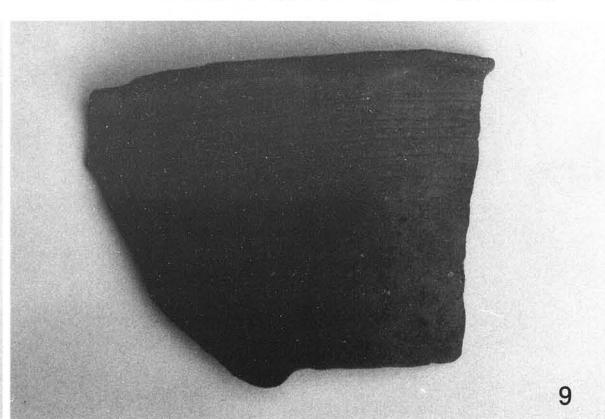
5 遺物番号18出土状況



6 調査終了後、埋め戻した現場全景



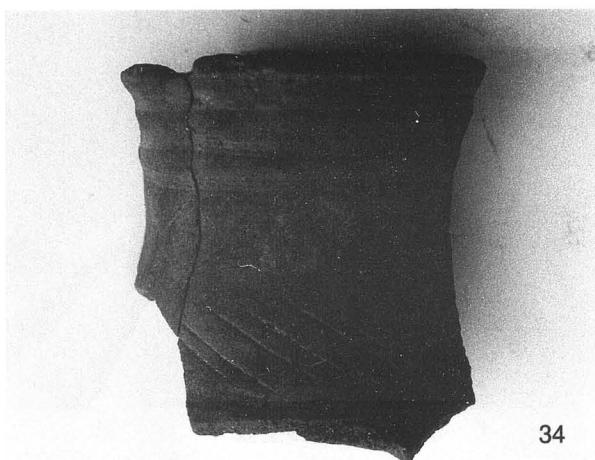
6



9



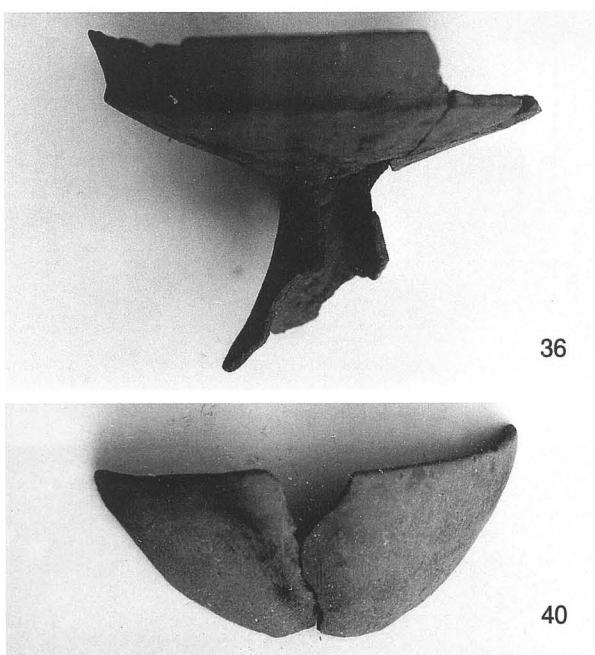
11



34



13



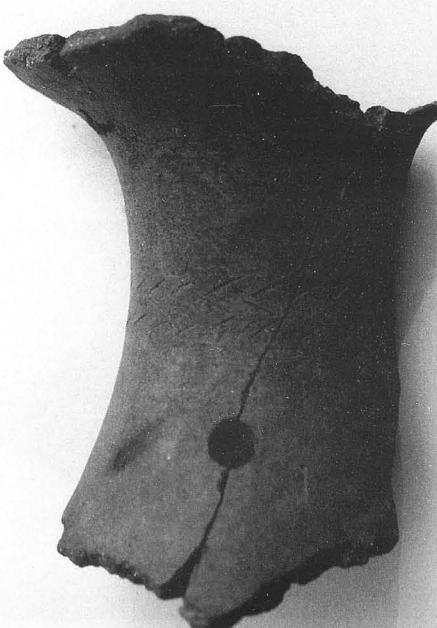
36



40



30



43

報 告 書 抄 錄

ふりがな	こうせんじやまいせき たけもといせき こうやはいじ ほんむらいせき							
書名	光専寺山遺跡 竹元遺跡 高野廃寺 本村遺跡							
副書名	高松平野南東部における埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第110集							
編著者名	川畠 聰							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087-839-2636							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号							
こうせんじやまいせき 光専寺山遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 いけだちょう 池田町	37201		34° 15' 47"	134° 05' 10"	1982.4.下旬	20m <sup>2</sup>	農地整備
たけもといせき 竹元遺跡	ひがしうえた 東植田町	37201		34° 14' 25"	134° 05' 52"	1987.夏	不明	自然崩壊
こうやはいじ 高野廃寺	かわしまほんまち 川島本町	37201		34° 16' 31"	134° 04' 49"	2006.8.28	5m <sup>2</sup>	手洗鉢覆屋 建築
ほんむらいせき 本村遺跡	いけだちょう 池田町	37201		34° 15' 31"	134° 05' 11"	1973.9.10 1973.10.3	140m <sup>2</sup>	道路拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
光専寺山遺跡	集落	弥生時代前期	包含層	弥生土器、石器、土師質土器、須恵器、瓦				
竹元遺跡	集落	弥生時代後期	不明	弥生土器				
高野廃寺	寺院	奈良～平安	包含層	須恵器、土師器、瓦				
本村遺跡	旧河道	弥生時代後期	旧河道	縄文土器、弥生土器、石器、鐵器				
要約	本報告書は、高松市教委が高松平野南東部で実施した確認および立会調査と発掘調査のうち、これまで未報告であり、かつ重要な4遺跡を掲載した報告書である。							

光専寺山遺跡 竹元遺跡 高野廃寺 本村遺跡

— 高松平野南東部における埋蔵文化財調査報告書 —

平成20年3月31日

編集・発行 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号  
印 刷 有限会社 中央ファイリング